

(財) ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第38集

富士ノ上Ⅱ遺跡

2008

ひたちなか市教育委員会
財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

(財) たちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第38集

富士ノ上Ⅱ遺跡

2008

たちなか市教育委員会
財団法人たちなか市文化・スポーツ振興公社



第2号住居跡 掘形



第2号住居跡 ビット2 貝殻（カキ）出土状況

序

ひたちなか市は、東が太平洋、南が那珂川に面している、自然環境に恵まれた土地であり、古くから人々の生活の場として、市内には数多くの遺跡が残されており、これまでに市内からは郷土が培ってきた種々の文化遺産が発見され、往時の生活文化を偲ぶ貴重な学術資料が発掘されてまいりました。都市化の中で貴重な文化遺産を保存していくことは重要なことであり、祖先からの遺産を文化都市づくりの基盤として活用し、子孫へと伝えていくことはわれわれの義務といえるでしょう。

太平洋をのぞむ台地上にある富士ノ上Ⅱ遺跡は、縄文時代から平安時代までの遺物を出土する集落跡であります。発掘調査はひたちなか市立那珂湊第二小学校改築に伴う事業として市の委託を受け、当社が実施いたしました。本書は、富士ノ上Ⅱ遺跡の縄文時代から平安時代までの調査全体の詳細を公表するため、本報告書として発刊するものです。貴重な資料の記録を収めた本書が、考古学研究にとって基礎資料となり、広く活用していただけますことを祈念いたしております。

なお、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多大なご指導・ご協力を賜りました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

2008年3月

財団法人 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

理事長 松本 正宏

例 言

- 1 本書は、ひたちなか市の委託を受けて、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が実施した富士ノ上Ⅱ遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、ひたちなか市立那珂珂湊第二小学校改築工事予定地域内に存在する埋蔵文化財の事前調査を目的とする。
- 3 発掘調査および整理報告は、財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社の文化振興課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次の通りである。

(2008年3月15日現在)

理 事 長	松本 正宏		
副 理 事 長	青野 紘也		
常 務 理 事	川崎 正		
理 事	仲田 昭	綱川 正	栗原 昭 佐藤 良元 牧野 米春 高柳 保幸
監 事	薄井 賢司	池田 聰	
文化振興課	課 長	西野 均	
	課長補佐 兼 所 長	鈴木 素行	
文化財調査 事 務 所	主 幹	佐々木義則	白石 真理
	主 任	稲田 健一	五十嵐友美
	囑 託	色川 順子	小松崎恵子 菊池 順子

- 4 発掘調査は2008年1月22日から3月7日まで実施された。発掘調査の従事者は次の通りである。

主任調査員 佐々木義則 調査員 色川 順子

調査補助員 石崎 寿子 磯崎千亜希 海老原四郎 廣水 一真 宮澤 治司 宮澤美代子
矢野 徳也 渡辺 恵子

- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。

磯崎千亜希 色川 順子 宇佐美幸枝 菊池 順子 後藤みち子 小松崎恵子 佐々木義則
鈴木 素行 西野 陽子 福原 雅美 渡辺 恵子

- 6 本書は、佐々木義則が編集した。

- 7 本書は次の分担で執筆した。

I-1・3、II-3、III 佐々木義則 I-2 鈴木素行 II-1 小松崎恵子 (14頁)・色川 順子 (15頁)

- 8 炭化種実の同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

- 9 発掘調査の出土資料は、本報告書刊行後に、ひたちなか市教育委員会へ移管される。

- 10 本書の作成にあたっては、次の方々にご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(50音順・敬称略)

飯塚 社司 石井 篤 大内 辰男 黒住 耐二 片西登美江 齊藤 新 酒井 広子
住谷 光男 関根 省二 武田 洋子 飛田とし子 根本 敬三 藤本 武 益子 昭彦
市立那珂珂湊第二小学校 那珂珂湊保健相談センター ひたちなか市役所那珂珂湊支所 ふるさと懐古館

目次

I 遺跡の概要	1
1 地理的環境	1
2 富士ノ上遺跡における調査の歩み	3
富士ノ上貝塚	3
和田ノ上貝塚	4
富士ノ上遺跡	7
和田ノ上遺跡	9
和田ノ上古墳	9
3 調査の経緯	12
調査に至る経緯	12
調査の経過	12
II 遺構と遺物	14
1 縄文時代～弥生時代の遺物	14
縄文時代の土器	14
縄文時代の石器	14
弥生時代後期後半の土器	15
2 古墳時代～平安時代の遺構と遺物	16
1 竪穴住居跡	16
第1A号住居跡	16
第1B号住居跡	20
第2号住居跡	21
第3号住居跡	25
第4号住居跡	26
2 土坑・ピット	26
3 表土出土の遺物	27
4 遺物観察表	27
第1A号住居跡	27
第1B号住居跡	29
第2号住居跡	29
第3号住居跡	31
第4号住居跡	31
第1号土坑	31
A地区表土	31
B地区表面採集	31

III 富士ノ上II遺跡周辺における 奈良時代集落の様相	32
1 那賀郡幡田郷における 奈良時代集落の調査	32
2 規模からみた竪穴住居跡の分類	32
3 集落遺跡における竪穴住居跡群の構成	34
4 富士ノ上II遺跡第1A・2号住居跡の理解	36
写真図版 報告書抄録	

挿図目次

第1図 「水戸郡珂湊絵図」	1
第2図 富士ノ上II遺跡の位置	1
第3図 富士ノ上II遺跡周辺の地形と遺跡	2
第4図 富士ノ上遺跡における遺構と遺物の分布	3
第5図 富士ノ上貝塚の今昔	4
第6図 富士ノ上遺跡の失頭器	4
第7図 和田ノ上貝塚、小川貝塚出土のマダイ、カワオ骨	5
第8図 和田ノ上貝塚出土土器	6
第9図 富士ノ上遺跡の十王台式土器の報告	7
第10図 富士ノ上遺跡「イ号住居址」	7
第11図 富士ノ上遺跡「1～5号址」の土器	8
第12図 和田ノ上遺跡と富士ノ上遺跡の古墳時代 前期土器	9
第13図 和田ノ上古墳の現況	9
第14図 A地区調査前状況	12
第15図 B地区調査前状況	12
第16図 A地区調査状況	12
第17図 B地区調査状況	12
第18図 富士ノ上II遺跡調査区全体図	13
第19図 調査区出土の縄文式土器及び石器	14
第20図 調査区出土の弥生式土器	15
第21図 第1A・B号住居跡	17
第22図 第1A・B号住居跡遺物出土状況	18
第23図 第1A号住居跡出土遺物(1)	19
第24図 第1A号住居跡出土遺物(2)	20
第25図 第1B号住居跡出土遺物	20
第26図 第2号住居跡	22

第27図	第2号住居跡遺物出土状況	23
第28図	第2号住居跡出土遺物	24
第29図	第3号住居跡、第1・2号土坑、第1号ピット	25
第30図	第3号住居跡・第1号土坑遺物出土状況	25
第31図	第3号住居跡出土遺物	25
第32図	第1号土坑出土遺物	25
第33図	第4号住居跡	26
第34図	第4号住居跡遺物出土状況	26
第35図	第4号住居跡出土遺物	26
第36図	A地区表土出土遺物	27
第37図	B地区表面採集遺物	27
第38図	那賀郡幡田郷における奈良時代集落	32
第39図	竪穴住居跡竪穴部規模の分布	33
第40図	竪穴住居跡の空間利用	34
第41図	竪穴面積の比較	34
第42図	規模別にみた竪穴住居跡の分類と消長	34
第43図	船窪遺跡の竪穴住居跡群	35
第44図	鷹ノ巣遺跡の竪穴住居跡群	35
第45図	半分山遺跡の竪穴住居跡群	35
第46図	猪谷津周辺の奈良・平安時代遺跡	37

- 5 遺物園における断面の表現は、黒塗りが須恵器、白抜きが土師器・瓦、斜線が石器・鉄器・土師・紡錘車であることを示す。

表 目 次

第1表	和田ノ上貝塚貝種目録	5
第2表	和田ノ上貝塚貝種組成	5
第3表	和田ノ上貝塚ヤマトシジミ・ハマグリ・ マガキ殻高分布	5
第4表	富士ノ上貝塚貝種組成	5
第5表	小川貝塚貝種組成	5
第6表	弥生式土器一覧表	15

凡 例

- 遺構図および遺物園の縮尺は、原則として以下の通りである。
遺構図 1/80, 1/40
遺物園 1/4, 1/2
- 遺構図の方位は磁北を使用している。
- 遺構図にみられる「K」の記号は攪乱を示す。
- 住居掘形平面図における底面のレベルは、任意に決めた±0の位置を基準として、そこからの比高差(単位はcm)で示した。

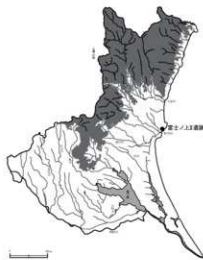
I 遺跡の概要

1 地理的環境

ひたちなか市立那珂湊第二小学校地内に所在する富士ノ上Ⅱ遺跡は、ひたちなか市東部、旧那珂川河口左岸に位置する。遺跡周辺は、那珂湊の市街地が広がっており、現在は住宅が建て並ぶ景観となっている。

那珂川下流左岸域には、北方に向かって入り込む大・小の支谷が形成されるが、富士ノ上Ⅱ遺跡は、そうした谷のうち最も海岸近くに位置し、那珂湊市街地から北方に入り込む落谷津と呼ばれる谷沿いに立地する。その谷には、明治18年の2万分の1地形図によると大きな沼地が存在したが、昭和20年ごろには整然とした水田になっていた（『船倉遺跡群 埋蔵文化財分布・試掘調査報告書』）。

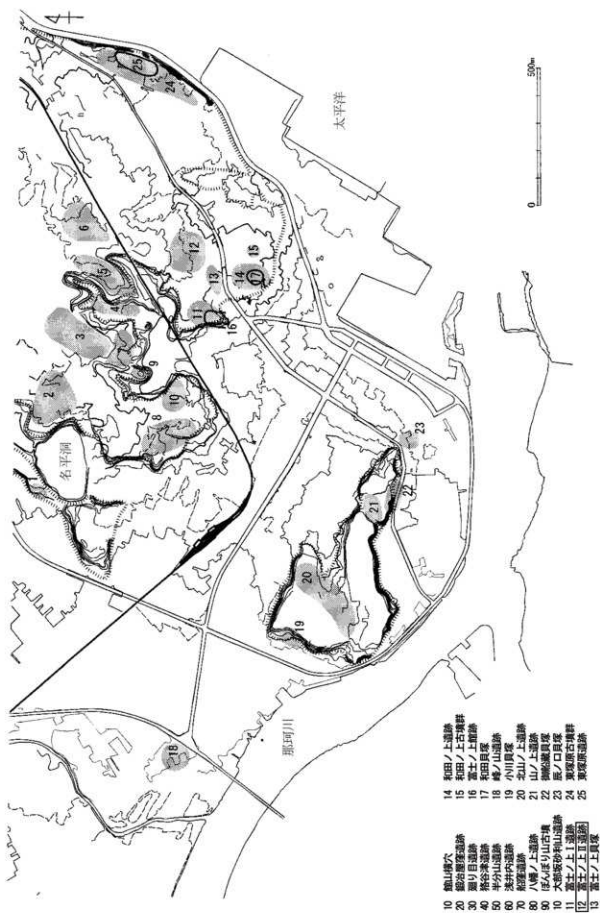
また明治期まで那珂川流路は河口で大きく北方へ屈折し、河口には大洗方面から北方へ延びる「沖ノ洲」という砂嘴が存在していた。これは沿岸流、漂砂、北東の卓越風の影響により形成されたものといひ、このような地形は久慈川をはじめとする県北諸河川でもみられるものである（那珂湊市史料第七集）。富士ノ上Ⅱ遺跡は、この旧那珂川河口に面しており、漁業や物流にとって重要な地点である大河川の河口部を臨む地に立地した遺跡でもあったのである。



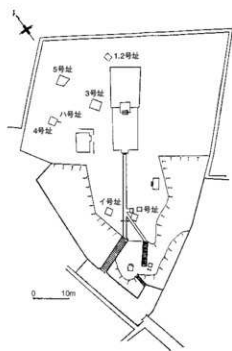
第1図 「水戸那珂湊輪図」（『那珂湊市史料』第一集）



第2図 富士ノ上Ⅱ遺跡の位置
(1:25000 ひたちなか 国土地理院発行 平成11年)



第3図 富士ノ上II遺跡周辺の地形と遺跡

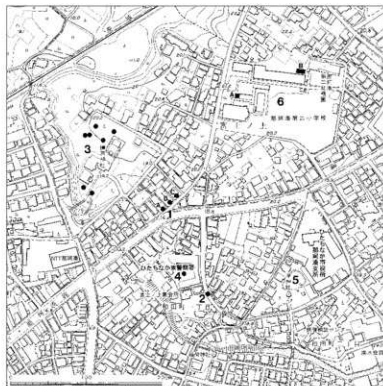


権原神宮境内の住居跡

(〔上川名1968〕より引用、加筆)

イ・ロ・ハ号址：弥生時代後期

1～5号址：古墳時代後期



1：富士ノ上貝塚、2：和田ノ上貝塚、3：富士ノ上（Ⅰ）遺跡、

4：和田ノ上遺跡、5：和田ノ上古墳、6：富士ノ上Ⅱ遺跡

第4図 富士ノ上遺跡における遺構と遺物の分布

2 富士ノ上遺跡における調査の歩み

富士ノ上貝塚 1918(大正7)年、『歴史地理』第32巻第4号に富士ノ上貝塚の発見についての記事が掲載された。同年9月2日付の『二八新報』を引用した『茨城県湊町の貝塚』である。旅行中の吉田文俊が「湊町7丁目富士坂上根平七宅庭前の丘陵上に貝塚と堅穴とを新たに発見した」という。「堅穴の最底部とも見るべき所には、居炊埴場ありて、その附近には燼灰の附着せる自然の丸石・土鍋の破片・磨製石斧の破片も旧時の儘に保存せられありき」と記述されており、貝塚とともに住居跡も確認されていたらしい。1923(大正12)年に刊行された『那珂郡郷土史』は、「本郡湊町小川貝塚並七丁目富士坂の堅穴の如きはその窟内の縄紋式土器、土鍋、土鉢、石斧、石槌、石刀等の遺物によって明かにアイヌ系統の先住民族たることを知ることが出来る」と記述する。富士ノ上貝塚については1918(大正7)年の所見を引用したものと見られるが、小川貝塚の存在も既に知られていたことがわかる。

「昭和22年の頃から、この付近の土地は宅地化がすす

み、土砂の採土工事や道路の側溝工事、あるいは警察署の移転工事があったりして、にわか遺物の出土が伝えられるようになった」[井上1968]という。井上義安の記述によれば「昭和27年頃、藤本弥城及び佐藤次男の記述によれば「昭和30年」、『園部繁之介氏所有の土地(約93坪)が、売却されて採土工事を行った」[井上1968]ことにより、富士ノ上貝塚から多量の遺物が出土した。調査年の表現は異なるが、同一地点において1955(昭和30)年の相前後した時に調査が行われたらしい。遺物には縄文時代前期の所謂「縄文土器」と「浮島式」があり、藤本による調査では小規模な貝塚が検出された。井上は1966(昭和41)～1968(昭和43)年に土器を報告し、藤本は1977(昭和52)年に調査を報告する。井上による記述は「貝塚および住居址の存在が確認されていない」[井上1967]、「採土現場の一部から土器に混じて、貝殻が少量出土したともいわれているが、私たちは実見する機会に恵まれなかった」[井上1968]、「関係者の談話を総合してみると、一部に小貝塚を伴う住居址群があった可能性が高い」[井上1976]

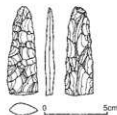


1955年〔藤本1977より引用〕



2008年（電柱が同位置に立つ）

第5図 富士ノ上貝塚の今昔

第6図 富士ノ上遺跡の尖頭器
(〔井上m1976〕より引用)

と変化する。藤本による調査の情報が徐々に井上へと伝えられていった経過を窺い知るのである。

「工事現場を実見したことのある佐藤次男氏の観察によると、2種類の土器が、それぞれ上下2層にわかれて出土したようであったとのこと」〔井上1968〕については、佐藤も「土器型式が明瞭に区別できる層位が観られた」〔佐藤1986〕と記述を残している。「2種類の土器」とは「織維土器」と「浮島式」のこと。これについては、「昭和39年5月10日、本地点に接する鈴木はつ氏宅の前庭を幅1.5×長さ2.5m掘って、土器の出土層位を確かめた」という調査が井上により実施されており、「前記のような出土状態を確認することはできなかった」ことが記録されている。

さて、富士ノ上貝塚における各調査の地点を記載の個人名等から特定してみると、1918(大正7)年に貝塚と住居跡が発見されたのは、現在の主要地方道水戸・那珂湊線が坂道のカーブでY字路に分岐する地点(第4図1-A)、1955(昭和30)年に井上と藤本が別個に調査したのは、その北側に隣接する地点(第4図1-B)、1964(昭和39)年に井上が層位を調査したのは、さらにその北側に隣接する地点(第4図1-C)となる。藤本が検出した貝塚は、1918年に発見された貝塚の北側の端部に相当するものなのであろう。後に楳原神社境内の調査では、「付近の畑からは前期の黒浜式土器の破片が多量に検出され、楳原神宮の道路に面した崖には黒浜式土器に属する堅穴が露出している所もある」〔上川名1968〕ことが報告されており、縄文時代前期の集落跡としての富士ノ上貝塚は、貝塚が検出された地点から西方向への広がりが確認されていた。また、「富士ノ上台地」からは、「昭和42年3月、大須賀恒氏採集による」という「石質は頁岩」の尖頭器が報告されている(第6図)。「縄文時代草創期前半に位置する」と記述されたが、この尖頭器も、縄文時代前

期の石器であろう。

和田ノ上貝塚 1989(平成元)年3月、和田町1丁目において水道工事中に貝塚が発見された。富士ノ上貝塚から南東方向に約130mの位置である。この貝塚は、発見の当初は「和田貝塚」〔斉藤1992〕と報告され、後に「和田ノ上貝塚」として登録されることになる。発掘調査は行われなかったが、貝層を含む遺物が採集された。遺跡台帳には「貝層厚約60cmを測る部分があり、数地点がある。ハマグリ主体、一部シジミ純貝層」と記録されている。「数地点」という貝塚は少なくとも3地点があるらしく、遺物は第1～3貝層に分けて保管されている。貝塚を構成する貝種は、水産の13種(第1表)があり、他に陸産のオカチョウジガイ、ホソオカチョウジガイも1個体ずつ見られる。「ハマグリ主体」という記述は、重量比に表現されることになる貝殻の体積に基づくものであろう。個体数では、いずれの貝層もヤマトシジミが最も多い(第2表)。それでも、富士ノ上貝塚と比較して、第1貝層のハマグリ比率が高いことは確かである(第4表)。時期については「黒浜式期の貝塚」〔斉藤1992〕と報告されている。

貝塚の時期と貝種組成についてもう少し細かく見ると、和田ノ上貝塚の第1貝層には所謂「黒浜式」でも「森東3式」(第8図3・4)と「植房式」(第8図7～11)が含まれている。一方、第3貝層には「森東2式」(第8図14)があり「植房式」は見られない。したがって、第3貝層が古く、第1貝層が新しいという時期差が捉えられ、時期の新しい第1貝層にハマグリ比率が高いことを認めるのである。富士ノ上貝塚においては、貝層中の土器を特定できないものの、「第I、II群土器」とされた「森東式」「植房式」を主体とする土器群が「主に黒褐色土層の下層の部分から出土」〔藤本1977〕しており、貝塚は「黒褐色土層の下部」でも最下層に堆積していたらしく、その時

第1表 和ノ上貝塚貝目録

貝目録	カサガイ目	ヨメガカサガイ科	ベッコウカサ	<i>Cellana grata</i>
扇貝目	古扇貝目	ミニガイ科	クロアワビ	<i>Haliotis (Nordotis) discus discus</i>
		ニシキウズガイ科	ワホガイ	<i>Chlorostoma lischkei</i>
			コシダカカンガラ	<i>Omphalium rusticum</i>
			パナエラ	<i>Omphalium pfeifferi pfeifferi</i>
			インダタミ	<i>Monodonta labio form confusa</i>
		ササエ科	ササエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i>
腕貝目	殻貝目	タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glossulax didyma</i>
		アツホガイ科	レイノガイ	<i>Thais (Rhesina) branti</i>
二枚貝目	カキ目	イタホガキ科	マカキ	<i>Cressetrum eggs</i>
	マルスダレガイ目	シオササナミ科	ワスレイソシジミ	<i>Nuttallia japonica</i>
		シジミ科	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
		マルスダレガイ科	ハマグリ	<i>Meretrix lasoria</i>

第2表 和ノ上貝塚貝種組成

種名	第1層 (SM1)				第2層 (SM2)				第3層 (SM3)			
	個体数	種数 (%)	重量 (%)	体積 (%)	個体数	種数 (%)	重量 (%)	体積 (%)	個体数	種数 (%)	重量 (%)	体積 (%)
ベッコウカサ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
クロアワビ	1	1	68	124	1	1	1	1	1	1	68	124
ワホガイ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
コシダカカンガラ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
パナエラ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
インダタミ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
ササエ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
ツメタガイ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
レイノガイ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
マカキ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
ワスレイソシジミ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
ヤマトシジミ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
ハマグリ	1	1	15	26	1	1	15	26	1	1	15	26
合計	10	10	100	180	10	10	100	180	10	10	100	180

第3表 和ノ上貝塚ママトシジミ・ハマグリ・マカキ殻高分布

階高 (mm)	ママトシジミ				ハマグリ				マカキ			
	SM1	SM2	SM3	SM4	SM1	SM2	SM3	SM4	SM1	SM2	SM3	SM4
10-20	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
20-30	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30-40	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40-50	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
50-60	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
60-70	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
70-80	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
80-90	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
90-100	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100-110	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
110-120	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
120-130	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
130-140	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
140-150	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
150-160	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
160-170	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
170-180	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
180-190	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
190-200	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

第4表 富士ノ上貝塚貝種組成

種名	個体数	種数 (%)	重量 (%)	体積 (%)
クロアワビ	2	0.1		
アサシンガイ	1	0.1		
ワホガイ	262	1.3		
コシダカカンガラ	1	0.1		
パナエラ	3	0.2		
インダタミ	2	0.1		
ササエ	8	0.3		
ツメタガイ	1	0.1		
レイノガイ	3	0.2		
マカキ	5	0.2		
ワスレイソシジミ	2	0.1		
ワホガイ	8	0.3		
ムササキイソコ	2	0.1		
ウミウシ	1	0.1		
カサガイ	8	0.3		
イソシジミ	16	1.0		
ヤマトシジミ	1361	62.0		
ハマグリ	165	7.7		
オホシジミ	19	1.0		
合計	2662	100.0		

第5表 小川貝塚貝種組成

種名	第1層		第2層	
	個体数	重量 (%)	個体数	重量 (%)
クロアワビ	1	0.1	1	0.1
ワホガイ	1	0.1	1	0.1
パナエラ	3	0.2	3	0.2
ササエ	1	0.1	1	0.1
アサシンガイ	2	0.1	2	0.1
マカキ	59	30.2	59	30.2
シオホケ	3	0.2	3	0.2
イソシジミ	1	0.1	1	0.1
ワオホタマササガイ	2	0.1	2	0.1
ヤマトシジミ	517	89.8	517	89.8
カサガイ	1	0.1	1	0.1
アサリ	2	0.1	2	0.1
ハマグリ	192	66.0	192	66.0
オホシジミ	19	1.2	19	1.2
合計	526	100.0	526	100.0

*第1～5表の貝種目録及び貝種組成は陸産貝を除く。貝種の和名及び学名、分類及び記載の順序は[奥谷等2000]に拠る。

*第2～4表の貝種組成の「個体数」は最小個体数である。

*第4表の「個体数」は[藤本1977]、第5表の「個体数」は[藤本1980]に基づく。貝種も報告のままとした。

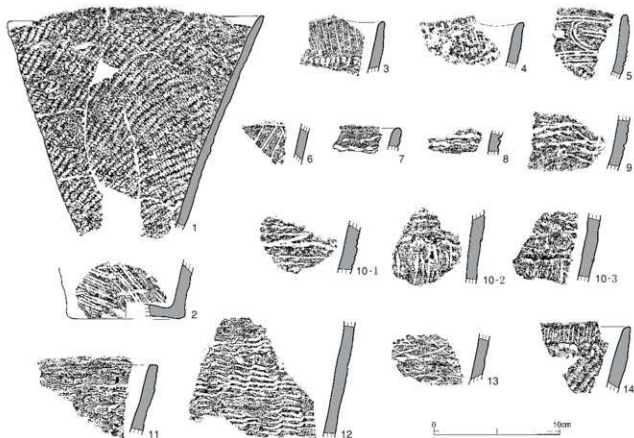


1・2: マダイ、前上顎骨左、3: マダイ、主上顎骨左、4: マダイ、角骨右、5・6: マダイ、口蓋骨左、

7・8: マダイ、主腮蓋骨右、9: マダイ、後側頭骨左、10: マダイ、舌顎骨左、11: マダイ、顎骨、

12: マダイ、主上顎骨左、13: カツオ、椎骨、14: カツオ、第一脊椎骨

第7図 和ノ上貝塚、小川貝塚出土のマダイ、カツオ骨（1～10・13:和ノ上貝塚、11・12・14:小川貝塚）



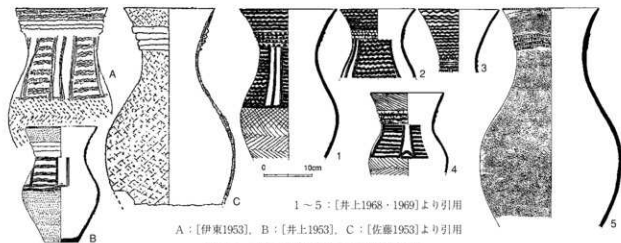
第8図 和田ノ上貝塚出土土器 (1-13:第1貝層, 14:第3貝層)

期は「第1群土器」とされた「森東2式」ではないかと推定される。つまり、富士ノ上貝塚は、和田ノ上貝塚の第3貝層と同時期に形成された貝塚であり、これがヤマトシジミを主体とする。小川貝塚においては、下位に堆積する第I貝層がヤマトシジミを主体とするのに対して、上位に堆積する第II貝層がハマグリを主体とすることが報告されている(第5表)。第I貝層は「第1群土器第5類」とされた「森東2式」、第II貝層は「浮島II式」の時期に形成された貝塚である。現在の那珂川河口域に立地する縄文時代前期の貝塚においては、「森東2式」の時期にはヤマトシジミ、「浮島II式」の時期にはハマグリを主体とした貝塚の形成が認められており、和田ノ上貝塚の資料からは、その変化が「植房式」の時期に生じたことが推定されるのである。

次に、和田ノ上貝塚の第1貝層から検出された魚骨を観察してみると、マダイが含まれていることに気付く。頭部骨格については、前上顎骨左2点、主上顎骨左1点、角骨右1点、口蓋骨左2点、主總蓋骨右2点、後側頭骨左1点、舌顎骨左1点を見出した(第7図1~10)。比較のためにクロダイを報告しておく、前上顎骨左1

点・右1点、主上顎骨左2点・右2点、方骨左1点、歯骨左1点、角骨左1点・右1点、主總蓋骨右1点。スズキは主總蓋骨左1点のみであった。クロダイ及びスズキと比べて、マダイの数量は少ない。さらに、体部骨格には1点のみではあるがカツオの椎骨を認めた(第7図13)。富士ノ上貝塚では、クロダイのみが「上、下両顎骨数個と歯片が鱗(大、小)とともに出土した」[藤本1977]と報告されている。また、遠原貝塚において「森東1式」の貝塚から検出されたのも、クロダイ、スズキであり、マダイ、カツオは含まれていない⁽⁸⁰⁾。これに対して、小川貝塚の第II貝層にはクロダイ、スズキとともにマダイ(第7図11・12)、カツオ(第7図14)が検出されている⁽⁸¹⁾。クロダイ・スズキは内湾性魚種であり、これにマダイ、カツオという外洋性魚種が「植房式」の時期に複合することになり、具種組成の変化と同期するのである。

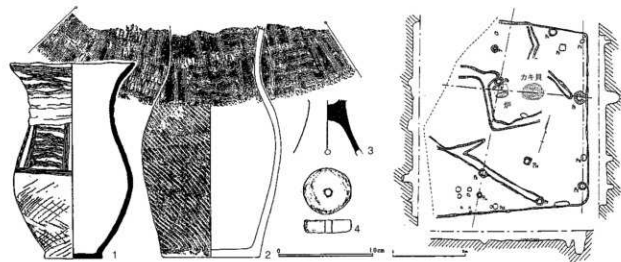
和田ノ上貝塚のような立地と具種組成は、久慈川流域にも「植房式」の泉原貝塚に見られる。泉原貝塚にはハマグリが個体数で51~97%を占める貝層が堆積しており、クロダイ、スズキの他にマダイ、マアジ、マイワシなどの外洋性魚種が検出された。また、福島県いわき市の夏



1～5：[井上1968・1969]より引用

A：[伊東1953]，B：[井上1953]，C：[佐藤1953]より引用

第9図 富士ノ上遺跡の十王台式土器の報告



第10図 富士ノ上遺跡「イ号住居址」([上川名1968][井上1982]より作成)

井川流域にある「植房式」の弘源寺貝塚でも、ヤマトシジミが個体数で50%以上を占めるが、ハマグリも20%ほどの比率があり、クロダイ、スズキの他にマダイ、カツオ、マアジ、マイワシなどの外洋性魚種が報告されている。漁場は湾内であったかもしれないが、外洋性の魚種に対応するための立地であり、灌水域での漁撈活動が反映された貝種組成の変化であったと考えることができよう。霞ヶ浦沿岸における「植房式」の美浦村大谷貝塚では、漁具に骨角器の逆刺付刺突具が検出されている⁽¹⁷⁾。弘源寺貝塚にはこれが見られず、釣針が報告されている。那珂川、久慈川流域の「植房式」には、東北地方南部の土器群が複合する。外洋性魚種を対象とした漁撈の技術系統を、東北地方南部に求めようとするならば、「道路敷地の他にも周辺に予想される」という和田ノ上貝塚においては、釣針の検出が今後の課題となるであろう⁽¹⁸⁾。

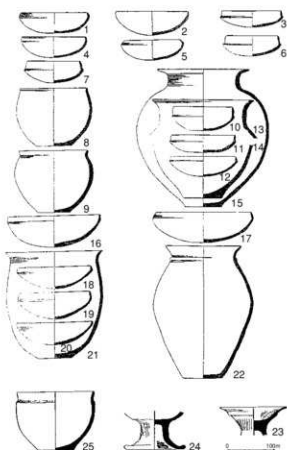
富士ノ上遺跡 「本遺跡は、昭和20年頃から境内よ

り遺物がしばしば発見され注目されていた所である」[上川名1968]という。「たまたま昭和23年4月に、榎原神宮、宮司井上義氏が境内に杉苗を移植せる際、偶然住居址を発見」[上川名1968]という記述は、「5例の弥生式土器は、本遺跡西北部の杉林中において発見されたもの」、「土器が出土した場所は、よく踏みかためられたローム面上であるから、ここが堅穴住居址床面の一部であったと考えられる」[井上1968]という井上義安の報告に該当するのであろうか。井上が報告した5点の「十王台式」(第9図1～5)の一部は、1953(昭和28)年には既に伊東重敏、井上義安、佐藤次男によりそれぞれ報告されていた(第9図A～C)。これらが同一の住居跡の資料であることが明らかにされるのは1968(昭和43)年のことである。「本土器群と共に出土した12個の底部にはすべてのものに布目の痕跡が認められる」というように、他にも多量の破片が出土したらしい。

1949(昭和24)年には、佐藤を中心として水戸第一高等学校及び那珂湊第一高等学校の学生が発掘調査を実施した。5月8日に第1次、7月8日に第2次、8月の井上義による調査を第3次として、8月7～12日に第4次の調査が記録されている〔佐藤1952〕。1949年の調査では、「イ号址」及び「ロ号址」という「十王台式」の住居跡2基が発掘されたらしく、特に「イ号址」については5月8日の調査であったことを佐藤が記述している〔佐藤1991〕。「ロ号址」の調査は、「8月ボーリング操作によって炉址を発見し、同月4日から7日まで発掘調査を行ない、(ロ)号住居址を検出した」〔上川名1968〕というから、井上義による調査であったらしい。8月7～12日には、「佐藤西野 8月7日より12日まで 那珂郡那珂湊町榎原神宮境内にて井上先生の指導下 土師住居址を発掘 珍らしき電址現る 8月20日も引き続き発掘す」〔佐藤1949〕という記事によれば、「土師住居址」が調査されている。さらに「西野佐藤君9月湊榎原神社土師住居址発掘」〔佐藤1949〕と、9月にも発掘調査が行われた。

1951(昭和26)年には、上川名昭を中心として「国学院大学学生、井上義安君と、同君の岳父榎原神宮司井上義氏の3人で協議して、8月16日より10日間、26日まで発掘調査を行なうことに決定し、当時那珂湊一高卒業生、磯崎正彦君、水戸一高卒業生佐藤次男君、茨城大学学生、西野文男君及び那珂湊一高、二高、水戸一高、二高の史学会員の応援を得て調査を行なった」〔上川名1968〕。「ハ号址」という「十王台式」の住居跡、「1～5号址」という古墳時代後期の住居跡が調査されている。この他にも、「1号址、2号址の北側に一部床面の発見された十王台式期の住居址も認められた」〔上川名1968〕ことが記述されており、榎原神宮境内には「十王台式」の住居跡が少なくとも5基は分布する。

「十王台式」については、1948(昭和23)年に発見された土器も1949(昭和24)年に調査された2基の住居跡も、1951(昭和26)年の調査とともに上川名の報告に掲載されることになった。「イ号址」には、「炉跡の東側の床面上にカキの貝殻が径約50cmの範囲にうず高く積まれて」〔佐藤1991〕検出されたことが報告されている(第10図左)。これは極めて稀有な事例である。近接するほんぼり山・半分山・船窪の3遺跡において、32基に及ぶ「十王台式」の住居跡を調査して

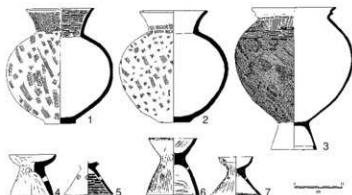


4～7：2号址、10～12：3号址、23～25：4号址
その他については出土した住居跡の記述が無い。

第11図 富士ノ上遺跡「1～5号址」の土器
(〔上川名1968〕より作成)

も貝塚は検出されていない。「イ号址」の土器については、1968(昭和43)年の上川名、1982(昭和57)年の井上の報告を併せて見る必要がある。上川名の報告には、「炉の付近より口縁部の欠損せるほぼ完形に近い十王台式の壺が発見され、その他、同式の破片が大量に検出されて居る。又炉の近傍から紡錘車が発見」と記述され、「十王台式」の小型壺形土器(第10図1)、高坏形土器の脚部(第10図3)、紡錘車(第10図4)が掲載された。井上の報告には、「遺物は、炉址の付近に多く散在し、床より僅かに浮いて十王台式の破片とともに紡錘車(1個)や図示したような土器が出土した」と記述され、中型壺形土器(第10図2)が掲載された。上川名による「口縁部の欠損せるほぼ完形に近い」という残存状態の記述は、井上が報告した中型壺形土器の描写とするのが相応しい。そうすると、より完形に近い小型壺形土器はどこから出土したものなのか、記述が無いことになる。

「イ号址」の中型壺形土器については、井上が「紡



1～5：和田ノ上遺跡〔井上1967〕より引用。6・7：富士ノ上遺跡〔上川名1968〕より引用

第12図 和田ノ上遺跡と富士ノ上遺跡の古墳時代前期土器

描文の線の太さ、深さの不揃いの点は著しく相違」すること、「十王台式に付随する付加条とは本質的に相違し、栃木県二軒屋遺跡(宇都宮大学資料室蔵品)の縄文そのものである」〔井上1982〕ことを指摘し、佐藤も「文様帯構成の方法、施文の方法、器形等の細部にわたって、十王台式土器の普遍的要素と異なる点」〔佐藤1999〕を認めている。このよう所謂「二軒屋式」の縄文と「十王台式」の文様構成を有する土器は、近在の北山ノ上遺跡及び船窪遺跡においても検出されており、ともに「十王台式」でも「武田式西埴段階古期」の土器群に伴うものと見られる。〔イ号址〕の小型壺形土器の文様構成が「小祝式」の「難塚類型」のものであることは、同時期と捉えるのに矛盾しない。〔佐藤1999〕また、1948(昭和23)年に発見された5点の土器も「武田式西埴段階古期」のものであり、「梶巾類型」を含まず12点の底部が全て布目痕であることなど「小祝式」の比率が低いことから、これも「武田式西埴段階古期」として捉えられるものであろう。〔佐藤1999〕

和田ノ上遺跡 1960(昭和35)年12月、「警察署庁舎を建設することになり、その基礎工事の際に堅穴住居址がいくつか発見されたらしい」〔井上1967〕。「そのひとつの堅穴内から一括出土した」という5点の土器が、1967年に「富士ノ上遺跡」の遺物として報告されている。1964年に発行された「茨城県遺跡地名表」では、「和田ノ上遺跡」として登録された範囲内に相当するが、報告者の井上義は、榎原神宮境内を中心とした「富士ノ上遺跡」の広がりとして捉えてのことであろう。5点の土器は、古墳時代前期の土器であり、「本調査の時に出土したものではないが、榎原神宮境内より発見されている」〔上川名1968〕という、やはり古墳時代前期の土器を井上は所有していた。分布調査による所見も「縄文時代前期円筒式、楕



(2008年2月撮影)

第13図 和田ノ上古墳の現況

房式、黒浜式、浮島式、弥生時代後期の十王台式、古墳時代前期の五領式を含む」〔井上1976〕ことが報告されており、富士ノ上貝塚及び富士ノ上遺跡と全く同時期に形成された遺跡であることがわかる。和田ノ上遺跡の範囲から1989(平成元)年に貝塚が発見されて、別個の遺跡として登録されることになったのが和田ノ上貝塚ということになるのである。

和田ノ上古墳 和田ノ上古墳は、1959(昭和34)年の「茨城県古墳総覧」には記載がなく、1964(昭和39)年の「茨城県遺跡地名表」から登録されることになる。ひたなか市役所那珂湊支所の南西側、津神社の境内に所在する古墳であり、「旭塚古墳」とも呼ばれるらしい〔佐藤1986〕。「古墳は直径約20m、高さ約5mの規模を有する円墳である。葺石、埴輪、周溝などは存在しない。墳丘裾部が部分的に削られている以外は、ほぼ原形をとどめている」〔井上1976〕と記録されてから、大きな変更は見られない。「古老の談によれば、なお数基の円墳が散在していたという」。「本古墳の東側160mの崖端に、戦後小円墳が破壊され、このとき石室内から直刀が出土している」〔井上1976〕。また「付近から人骨、直刀、鉄鏃などが発見された」〔佐藤1986〕とも伝えられているが、遺物の出土した地点、その後の行方については確認できていない。

富士ノ上貝塚の調査については藤本武氏に、和田ノ上貝塚については齊藤新氏に、貝類の同定については黒住尉二氏にご指導をいただいた。

註1 井上義安は、「那珂郡郷土史」を典拠として「大正12年の埴道路工事によって、多量の縄文時代の土器や石器が発見され

1 遺跡の概要

た」と記述したが、「茨城県清町の貝塚」は引用されておらず、富士ノ上貝塚の発見の時期を「那珂郡郷土史」の刊行年頃に充てたことが考えられる。藤本弥城による「大正13年頃この傾斜面台地の一部に宅地造成が行われた時に貝塚が発見され、相当量の貝殻が堆積していた所があったと云われている」のも、変容した伝聞かもしれない。

なお、1959(昭和34)年の酒造仲男「日本貝塚地名表」は、「茨城県清町の貝塚」を「清小川貝塚」に相当させているが、これは誤りである。

注2 藤本弥城は、小川貝塚について「昭和10年3月末、台地麓の地均し工事中に発見」[藤本1980]と記述しているが、遺跡はそれ以前に発見されていたことになる。

注3 那珂清町の遺跡台帳「埋蔵文化財包蔵地調査カード」の富士ノ上貝塚は1962(昭和37)年に佐藤次男が記入しており、「富士ノ上上層」として3点の「浮島式」[富士ノ上下層]として2点の、おそらくは「織壺土器」の拓影図が添付されている。

注4 「森東1・2・3式」[植原(1・2)式]については、[鈴木1996-1998-2003]を参照されたい。

注5 遠原貝塚の魚骨については、金子浩昌により「クロダイ 主上顎骨右2、左舌顎骨1 関節骨左1、背鰭第2棘1、他は鱗棘が3個あるが、おそらくクロダイのものを含むであろう」[金子1979]という報告がある。但し、これは井上義安が採集した資料であり、時期が特定できていない。「森東1式」のクロダイスキは、1995(平成7)年に発掘調査を実施した遠原貝塚7号住居跡の所見によるものである。この住居跡は「第1号住居跡」として報告されている[鶴志田1995]。なお、7号住居跡内貝層の重量による貝種組成は、ヤマトシジミ94.9%、マガキ3.1%、ハマグリ1.7%、その他0.2%である。

注6 小川貝塚の「マクロ 脊椎骨が検出された」[藤本1980]という報告を、カワオの第一脊椎骨に訂正する。なお、「和田貝塚」[藤本¹⁹⁹⁴]の「マクロ類の一種」もカワオに訂正される。

注7 財団法人茨城県教育財団2007「平成19年度 茨城県教育財団調査遺跡紹介展」パンフレットによる。

注8 小川貝塚における「浮島Ⅱ式」のⅡ貝層からは、逆刺付刺突具が出土している。

注9 上川名昭は「3・4号址」を「和泉式」、「1・5号址」を「鬼高式」、「2号址」を「国分式」の住居跡として報告した。「2号址」については、掲載された土師器環の実測図(第11図4～7)を見る限り、古墳時代後期のものと考えられる。「2号址」の報告に記述された「口台付(引用註:「高台付」の誤植)の須恵器の皿破片

2・3出土をみた」という須恵器は図示されていない。井上義安は「古墳時代後期の住居5軒」[井上1976]、佐藤次男は「古墳時代(和泉式、鬼高式)の住居5軒」[佐藤1991]として、この調査を引用している。

注10 井上義安によれば「この整穴の土器は、特別な理由があったわけでもないが、上川名氏執筆の報告に未掲載のままとなり今日に至ってしまった」[井上1982]という。井上は「茨城県弥生式土器集成」Ⅰに、「井上1968」を「那珂清町富士ノ上遺跡の土器Ⅰ」として採録しており、続報を予定していたことが窺える。おそらくは、「イ号址」の土器を中心としたものを考えていたのであろう。

注11 北山ノ上遺跡は[藤本¹⁹⁹⁹]第15図1の土器(再実測図は[鈴木2001]図11-6)、船窪遺跡は[鈴木2005]第62図5-6の土器が相当する。なお、「十王台式」の細別については、[鈴木2005]等を参照されたい。

注12 「イ号址」の小型壺形土器は、「富士ノ上、井上義安寄贈、K2912」として、2005年1月22日には国学院大学の旧・考古学資料館に展示されていた。ガラス越しのため、胎土についての詳細な観察はできていない。また、富士ノ上遺跡の発掘資料の全てが同資料館に寄贈されているのかも確認はしていない。

注13 八王子市郷土資料館が所蔵する井上郷太郎コレクションの「茨城県那珂清町富士台出土」[小川¹⁹⁸⁸]と記述された「十王台式土器片」は、富士ノ上遺跡に相当するものかもしれない。これも「武式西墳段層」の土器である。

注14 1964(昭和39)年の「茨城県遺跡地名表」は、「昭和37年度において文化財保護委員会の指導と助成のもとに、全県下におわたる遺跡の実地調査を行なった」とあり、「那珂清町 勝田市 那珂郡」の地域は「藤田彦 佐藤次男 須藤佐武 (川崎純徳)」が調査を担当している。那珂清町の遺跡台帳となる「埋蔵文化財包蔵地調査カード」は佐藤次男が記入しており、「富士ノ上遺跡」と「和田ノ上遺跡」を区別したのも佐藤であったと考えられる。

参考文献

- 伊東 重敏 1953 「常陸地方弥生式土器に関する系統と時差の問題」[考古学] 第12号 考古学会
- 井上 義 1967 「那珂清町富士ノ上警察署敷地の土師器」[茨城県の土師器集成] 第1集 茨城県考古学会
- 井上 義 1968 「那珂清町富士ノ上警察署敷地遺跡」[那珂清町の先史遺跡] 第2集
- 井上 義安 1953 「北関東の弥生式土器Ⅰ 十王台式土器」[若

- 木考古」第18-19号
- 井上 義安 1966 『茨城県那珂湊市富士ノ上遺跡』(未見)
- 井上 義安 1967 『那珂湊市富士ノ上遺跡』『那珂川の先史遺跡』第1集
- 井上 義安 1968 『常陸富士ノ上遺跡 十王台式土器』『研究年報』第12号
- 井上 義安 1968 『那珂湊市富士ノ上遺跡 -主として縄文前期後半の土器群を中心として-』『那珂川の先史遺跡』第2集
- 井上 義安 1969 『那珂湊市富士ノ上遺跡の土器』『茨城県弥生式土器集成』I 茨城県弥生式土器集成グループ
- 井上 義安 1976 『富士ノ上遺跡』『和田ノ上遺跡』『和田ノ上古墳』『那珂湊市遺跡分布調査報告書』所収
- 井上 義安 1976 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市文化財調査報告Ⅱ 那珂湊市教育委員会
- 井上 義安 1979 『富士ノ上遺跡』『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県
- 井上 義安 1982 『十王台式共伴資料に関する覚書 -富士ノ上遺跡イ号住居址出土土器-』『洞沼手帳』5
- 梅園 三 1923 『那珂郡郷土史総論』『那珂郡郷土史』宗教新聞社
- 小川 貴司 1988 『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社
- 奥谷 壽司 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
- 金子 浩昌 1979 『勝田市遠原貝塚出土の動物遺存体』『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』勝田市
- 上川名 昭 1968 『常陸富士ノ上遺跡』『研究年報』第12号
- 鴨志田周二 1995 『金上遠原貝塚の調査』『平成6年度 市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 斉藤 新 1992 『和田貝塚の調査概要』『茨城県考古学協会誌』第4号 茨城県考古学協会
- 酒詰 伸男 1959 『日本貝塚地名表』土曜会
- 佐藤 次男 1949 『会員消息』『水戸学生考古学会 考古』創刊号 水戸第一高校史学会
- 佐藤 次男 1952 『北茨城戦後考古学の活動状況』『考古学』第1巻第3号 考古学会
- 佐藤 次男 1953 『弥生式土器基本形態の地方差 -特に十王台類土器の異常性と東北日本弥生式土器の性格-』『考古学』第13号 考古学会
- 佐藤 次男 1986 『那珂湊の地名』那珂湊市
- 佐藤 次男 1991 『富士ノ上遺跡』『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県
- 佐藤 典邦 1986 『弘源寺貝塚 -縄文時代前期貝塚の調査-』『いわき市埋蔵文化財調査報告第13冊』いわき市教育委員会
- 鈴木 素行 1994 『久慈川・那珂川流域における貝塚調査の歩み』『久慈川・那珂川流域の貝塚 -藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅱ-』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第10集
- 鈴木 素行 1996 『関山式土器の「伴」 -関東地方東部における黒浜期の土器編年を考える-』『茨城県考古学協会誌』第8号 茨城県考古学協会
- 鈴木 素行 1998 『泉原貝塚における土器群の編年と系統 -土器に関する問題-Ⅱ-』『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会
- 鈴木 素行 2001 『弥生時代の環境 -弥生時代後期の「船室遺跡群」-』『船室Ⅳ -2000年度船室遺跡群発掘調査の成果-』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第22集
- 鈴木 素行 2003 『船山遺跡の土器 -茨城県南部における「関山式」『森束式』『植房式』の土器群-』『玉里村立史料館報』第8号
- 鈴木 素行 2005 『弥生時代の遺構と遺物』『船室遺跡』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第32集
- 藤本 武 1991 『藤本弥城先史資料整理調査報告書』V 勝田市教育委員会
- 藤本 武 1994 『和田貝塚』『富士ノ上貝塚』『小川貝塚』『久慈川・那珂川流域の貝塚 -藤本弥城先史資料整理調査報告書Ⅱ-』(財)勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第10集
- 藤本 弥城 1977 『富士ノ上貝塚』『那珂川下流の石器時代研究』I
- 藤本 弥城 1980 『那珂湊小川貝塚』『那珂川下流の石器時代研究』II
- 渡辺 誠 1998 『泉原貝塚の自然遺物』『泉原貝塚発掘調査報告書』日立市文化財調査報告第45集 日立市教育委員会

3 調査の経緯

調査に至る経緯

ひたちなか市においては、校舍老朽化に伴う市立那珂湊第二小学校の改築工事を計画したが、その対象地内には、周知の遺跡である富士ノ上Ⅱ遺跡が所在することから、市教育委員会では2007年8月に試掘調査を実施し、その結果、2地点より竪穴住居跡と思われる遺構が検出された。そこで同年12月、市は財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社に発掘調査を委託し、2007年度中に発掘調査が実施されることとなった。

調査の経過

富士ノ上Ⅱ遺跡は小学校敷地内に所在するため、調査区の設定に際しては、児童の安全を確保できるよう安全柵をめぐらす等の対策が行われた。調査区は、市教育委員会による試掘調査により住居跡と思われる遺構が検出された2地点を中心に、A地区・B地区の2地区が設定された。

調査期間／2008年1月22日～3月7日

調査担当／佐々木義則

調査面積／160㎡ 時代／縄文時代～平安時代

遺構／竪穴住居跡5基、ピット・土坑3基

1月 A地区は人力、B地区は重機により表土除去作業を実施する。B地区の表土除去は1日で終了するが、A地区は水道管の敷設や、表土が深かったことにより、表土除去作業は1月末まで行われた。

2月 A地区とB地区の調査を併行して実施する。両地区とも古代の住居跡が検出される。A地区の1号住居跡の調査は、住居上部に後世敷設された2本の水道管の存在が調査の支障となる。B地区は、昼間日の当たらない場所であるため、厳寒期にあたる当月は土が凍っており、これも調査の支障となった。調査中、当校6年生の授業が行われた。

3月 A・B地区の調査を終了し、機材等の撤収を行う。



第14図 A地区調査前状況



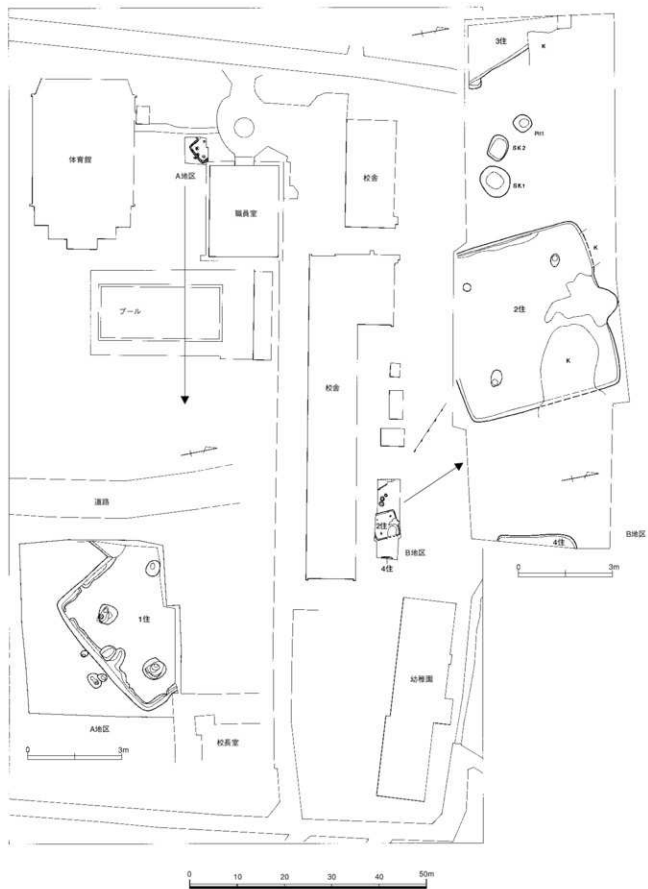
第15図 B地区調査前状況



第16図 A地区調査状況



第17図 B地区調査状況



第18図 富士ノ上Ⅱ遺跡調査区全体図

II 遺構と遺物

1 縄文時代～弥生時代の遺物

縄文式土器は10点、弥生式土器は17点検出されている。後世の遺構の覆土中から検出された破片が大部分であり、これらを一括し調査区出土として報告する。

縄文時代の土器

1点は早期中葉、他は中期後半の土器破片と思われる。第19図1は「田戸下層式」に相当する。器内・外面とも褐色で焼成は良好である。甕状工具で沈線文と刺突文を施した胴上部の破片である。刺突は器壁に対して斜め方向から施文している。内面は横方向に撫で調整され、胎土には微量の海綿骨針を含む。

2は無文部と縄文施文部を隆起線文で区画した胴上部の破片。器外面は褐色、器内面は暗褐色、焼成は良好。隆起線を撫で調整した後、単節縄文R Lを施文。胎土に多量の金雲母を含む。「加曾利EⅢ～Ⅳ式」に相当する。

3～7は単節縄文L Rのみを施文した胴部破片。器外面は褐色～暗褐色、器内面は暗褐色～淡褐色で、何れも焼成は良好。3・5～7の内面は甕状工具で縦方向に調整している。3は胎土に海綿骨針を少量含み、外面には炭化物が付着している。6・7は胎土が似ており、同一の個体である可能性も考えられる。

1968年の富士ノ上遺跡の報告では、加曾利E式土器に

ついて「表土中より出土させる小破片が殆ど」で「外から運ばれたことも考えられる」とされている[上川名1968]。今回も全て小破片であるが、遺構覆土からも検出していることから当該期の遺跡の存在を考えられる。

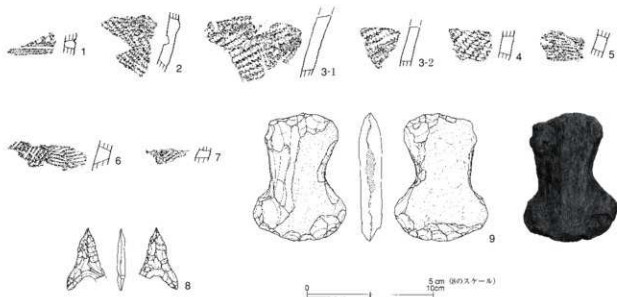
縄文時代の石器

8は「凹基無茎鏃」。一方の脚部を欠損。残存部分での計測値は最大長24.8mm、最大幅15.4mm、最大厚2.9mm、重量0.65g。石材はガラス質黒色安山岩か。押し剥離による器体成形が全面に及び、素材形状は不明。緩やかな側縁部から急角度で先端部を作り出している。

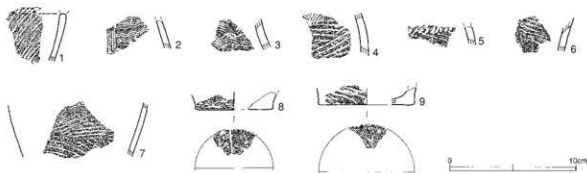
9は両側縁部に挟り加工を施し分胴状に成形した打製石斧。残存部分での計測値は最大長100.9mm、最大幅73.5mm、最大厚17.1mm、重量157.49g。石材は緑色片岩。表裏両面に自然面が認められ、板状礫を素材としていることが窺われる。一部破損。両側縁の挟り部分を中心に「潰し加工」が施されている。刃部には上下ともに摩滅痕が見られる。

参考文献

上川名昭 1968 「常陸富士ノ上遺跡」[研究年報]第12号(抜刷)



第19図 調査区出土の縄文式土器及び石器（制：潰し加工痕）



第20図 調査区出土の弥生式土器

弥生時代後期後半の土器

17点の破片が出土し、そのうち9点を掲載した(第20図)。

1は口縁部の破片である。口唇部から外面にかけて付加条第1種L+2Rの斜行縄文が施されている。2は縦区画され、波状文が施されている。櫛歯状工具の歯数は6本。3は5本櫛歯状工具による波状文が施されている。4は横位区画が下向きの連弧文。櫛歯状工具の歯数は5本。胴下部には付加条第2種L×Lと、R×Rで羽状縄文が構成されている。施文順序は上から下。5は横位区画が2段以上の帯状刺突文。刺突文の施文工具は多截竹管状工具である。胴下部には、LをZ巻きした原体(軸不明)による縄文が施されている。6はLをZ巻きした原体(軸不明)による縄文が施されている。7は中・小型の胴部である。RをS巻きした原体(軸不明)と、付加条第2種L×Lで羽状縄文が構成されている。施文順序は下から上。8・9は中・小型の底部である。底面は8が木葉痕、9が布目痕である。

1～9は、「十玉台式」に相当する。

(第6表 凡例)

- ※「出土位置」は、遺構を次のように記号化している。
「S」1号居路
- ※「計測及び観察」は、次のように記号化して、記載を分けている。
「法」法量に関する記載
「文」文様の特徴に関する記載(特に施文工具について記述した。文様の形象については実測図及び拓影図を参照とする。)
「胎」胎土の特徴に関する記載
- ※「法」の記載には、次の記号で、部位の計測値を表記している。(単位は「mm」、括弧内の数値は残存率で単位は「%」)
「高」器高、「※」付の数値は、底部からの残存高。「口」口縁部直径、「胴」胴部直径、「頸」頸部直径、「底」底部直径
- ※「文」の記載には、次の記号を使用する。
「器」口唇部の施文(さらに、「縄文」縄文原体の回転施文、「縄」縄文原体の刷み、「篦」篦状工具の刷み、「棒」棒状工具の刷み、「無」施文無し、「不明」施文の有無及び施文の不明、という記号の組み合わせで表記する。)
「帯」帯状刺突文(数値は刺突列の列数であり、確実なもの及び3条以上であることが確実なもののみ記載する。)
「底」底面の痕跡(さらに、「布」布目痕、「砂」砂痕、「葉」木葉痕、「調」調整痕、「不明」痕跡の有無及び圧痕原体の不明、という記号の組み合わせで表記する。)
「櫛」櫛歯状工具(3本以上の沈線と同時に施文した工具に対する表記。数値は櫛歯の数である。)
「縄」縄文原体(付加条第1種の原体には「+」、付加条第2種の原体には「×」の記号を使用する。摺余文あるいは軸線の不明な付加条縄文の原体には、糸の巻き方を「-Z」「-S」として表記する。)
- ※「胎」の記載には、次の記号を使用する。
「金」金雲母の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)
「骨」海綿骨針の含有(さらに、「多」含有が多量、という記号の組み合わせで表記する。)

第6表 弥生式土器一覽表

種別	番号	出土位置	計測及び観察
甲300	1	S12	文:斜行縄文、縄L+2R
	2	S11	文:櫛6
	3	A区	文:櫛5、胎:金
	4	A区	文:櫛5、縄L×L、R×R、胎:金
	5	S11	文:帯、縄L-Z
	6	S12	文:縄L-Z、胎:骨
	7	A区	文:縄R-S、L×L、胎:骨
	8	S11	文:法:底62(18)、文:葉痕
	9	A区	文:法:底76(13)、文:縄L-Z、葉痕

2 古墳時代～平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第1 A号住居跡

遺構

位置 A地区に位置し、第1 B号住居跡と重複する。

新旧関係 切り合いから第1 A号住居跡→第1 B号住居跡となる。

主軸方向・竪の位置 主軸方向はN-30°-Wを測り、竪は崩壊土の床面への広がりからみて、調査区外に位置する住居北壁に置かれたようである。

竪穴部の規模・形態 竪穴部の規模は、東西4.7mを測る。南北の規模は柱穴の位置から推測して推定4.4mほどとすると、竪穴部形態はほぼ正方形で、面積は推定20.7㎡となろう。

壁高 東壁45cm、西壁61cm、南壁49cm。

壁周溝 途切れながらであるが、東・西・南壁に認められる。

ピット ピットは、P1～P3が主柱穴、P4が出入口施設関連のピットと考えられる。主柱穴は大きな掘り込みを持つので、住居廃棄に際して柱が抜き取られた可能性がある。

ピットの深さは、P1が76cm、P2が85cm、P3が81cm、P4が12cmを測る。

硬化面 床面は、主柱穴の内側を中心に、P4から北壁に存在すると考えられる竪にかけて硬化している。

竪穴部の覆土 竪穴部の覆土は、住居廃絶後、壁際に第11・17層が堆積した後、人為的埋土の可能性があり、ロームブロックを含む暗褐色を基調とする土が堆積する。A B断面第19層、C D断面第13～15層は壁構築土の可能性があらう。

覆土上層の第1～3層には焼土を含んでおり、土師器甕破片を主とする遺物が多く出土した。竪粘土になる可能性のあるローム土の廃棄も認められることから、付近の住居跡において竪を壊した際の廃棄物を、当住居跡の埋没跡に投棄したのかもしれない。

住居掘形 住居掘形は全体的に掘り込んだ後、ロームブロックを多量に含む褐色を基調とした土を入れて、床面を構築している。掘形掘り込み部の底面には、鋤先痕が明瞭に残っており、各掘削痕の掘削方向をみると、竪

穴部周辺から内側に向けて掘り進んでいったようである。

なおP2は3つのピットの重複と捉えられるので、当住居跡は3回以上建て替えられた可能性がある。

遺物出土状況

遺物は全て破損品である。遺物は覆土下層から上層まで全体的に出土するが、特に上層と下層からの出土が多いようである。人為的埋土中の遺物は埋戻しの際に廃棄された遺物であろうが、上層出土遺物のうち、第1～3層付近からの出土遺物は、住居覆土を掘り込んで棄てられたものである可能性も考えられる。

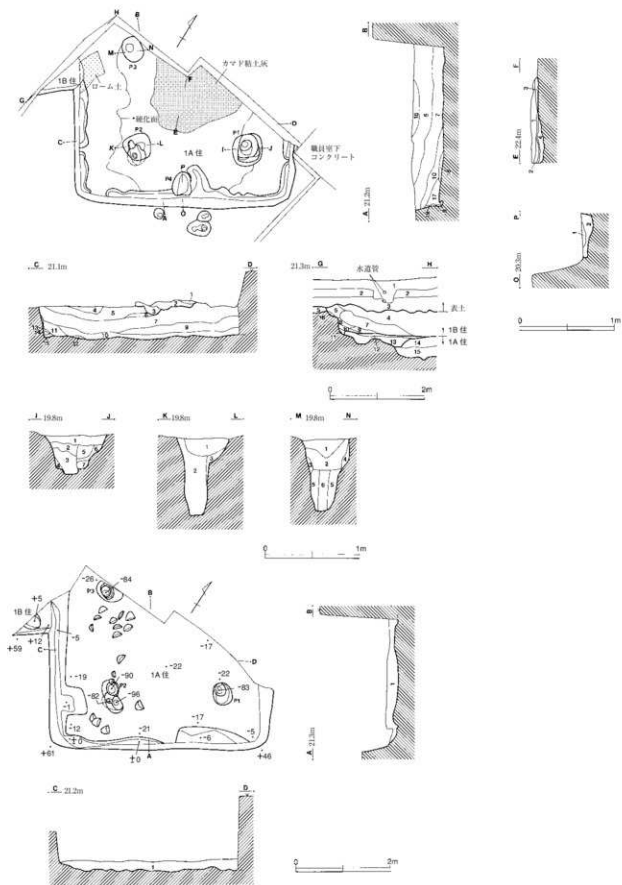
また、図化してはいないが、出入口部東側の南壁下床面から覆土下層にかけて礫が6点出土している。まともな出土であり単なる混入とは思えない。何かに利用された礫である可能性がある。

なお、床面に広がる灰混じりの竪崩壊土を洗浄したところ、イネ粒を中心とする多量の炭化種実が検出された。

遺物

遺物は覆土上層と下層から多く出土するが、出土位置の違いによる明確な年代差は認められない。当住居の覆土は人為的埋土と考えられるので、竪穴部埋没が長期にわたらなかったことを示すものと思われる。須恵器杯や有台杯蓋の形態からみて、8世紀第3四半期頃の土器群になるものと考えられる。

当土器群は須恵器杯類にヘラ記号が記される割合が少ないが、須恵器杯15・有台杯19・21の底部には、ヘラ記号「-」が記される。須恵器は木葉下窟産を主体としているが、須恵器杯18・甕30は胎土からみて新治窟跡群産であり、供膳具・貯蔵具とも新治窟産の製品が少量ではあるが使用されていることがわかる。土師器甕34・35・36も胎土からみて新治窟付近産であり、おそらく常陸型甕になるのであろう。8世紀第3四半期における当地域の土師器甕はほとんどが常陸型甕になるようであるので、当土器群の様相もそうした動向に沿うものである。常陸型甕の流通に伴って新治窟産の須恵器供膳具や貯蔵具も少量ながら当地域に流通するのかもしれない。26は、上半部を欠くため不明瞭ではあるが、おそらく長頸瓶に



第21図 第1A・B号住居跡 (下の図は住居跡掘形)

II 遺構と遺物

1住A・B・CD土層断面

- 1 暗褐色（ローム粒含む）
- 2 褐色（ローム土非常に多量に混じる（電筒輝小？） 焼土粒含む）
- 3 暗褐色（ローム粒含む 焼土粒少量含む）
- 4 暗褐色（黒褐色土混じる ローム粒少量含む）
- 5 暗褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック・焼土粒少量含む）
- 6 暗褐色（黒褐色土混じる ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む）
- 7 暗褐色（ローム粒・ローム小ブロック多量に含む 焼土粒少量含む）
- 8 黒褐色（ローム粒含む）
- 9 暗褐色（ロームブロック・ローム粒多量に含む 黒褐色土ブロック含む）
- 10 暗褐色（黒褐色土混じる ローム粒多量に含む 焼土粒少量含む）
- 11 暗褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む）
- 12 褐色（ローム土非常に多量に含む ローム小ブロック含む）
- 13 褐色（ローム粒多量に含む）
- 14 黒褐色
- 15 褐色（ロームブロック含む）
- 16 暗褐色（ローム粒含む 焼土粒少量含む）
- 17 暗褐色（ローム粒含む 焼土粒少量含む）
- 18 褐色（ローム粒多量に含む）
- 19 褐色（ロームブロック含む）

1住EF土層断面

- 1 棕色（焼けた砂とキマド粘土主体 第2層混じる）
- 2 明灰色（砂質キマド粘土含む）
- 3 黒褐色（第2層混じる）
- 4 暗褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む）

1住GH土層断面

- 1 暗褐色（泥・木屑多量に含む 雜まり無し）
- 2 褐色（ローム粒多量に含む 固く硬まる）
- 3 暗褐色（ローム粒やや多量に含む 焼土粒少量含む）
- 4 褐色（ロームブロック・ローム粒多量に含む 黒褐色土ブロック少量含む）
- 5 黒褐色（ローム土混じる）
- 6 褐色（ローム粒やや多量に含む）
- 7 暗褐色（ローム小ブロック少量含む ローム粒含む 黒褐色土少量混じる）
- 8 黒褐色
- 9 暗褐色（ロームブロック含む ローム粒多量に含む）
- 10 暗褐色（ローム粒含む）

- 11 暗褐色（ローム粒多量に含む）
- 12 暗褐色（ローム粒・ローム小ブロック多量に含む 雜まり有り 1B位相当）
- 13 暗褐色（ローム粒多量に含む 黒褐色土ブロック多量に含む 1B位相当）
- 14 暗褐色（ローム粒多量に含む ロームブロック・黒褐色土ブロック少量含む 1A位相当）
- 15 明褐色（ローム小ブロック多量に含む 黒褐色土小ブロック多量に含む 1A位相当）
- 16 黒褐色（ローム小ブロック多量に含む）

1住I土層断面

- 1 暗褐色（ローム粒含む）
- 2 黒褐色（ローム粒含む）
- 3 褐色（ローム粒含む）
- 4 明褐色（ローム土非常に多量に含む）
- 5 褐色（ローム粒多量に含む）
- 6 明褐色（ローム土非常に多量に含む）
- 7 黄褐色（ローム小ブロック主体）

1住K・L土層断面

- 1 暗褐色（ローム粒やや多量に含む）
- 2 明褐色（ローム土非常に多量に含む ローム小ブロック多量に含む）
- 3 褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む）

1住M・N土層断面

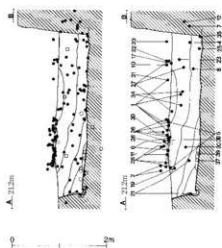
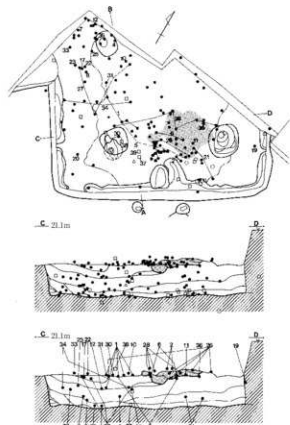
- 1 暗褐色（ローム粒やや多量に含む ローム小ブロック少量含む）
- 2 褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む 電鉄土少量混じる）
- 3 明褐色
- 4 明褐色（ローム土非常に多量に含む 電鉄土小ブロック含む）
- 5 褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック含む）
- 6 暗褐色（ローム粒含む 雜まり無し）

1住OP土層断面

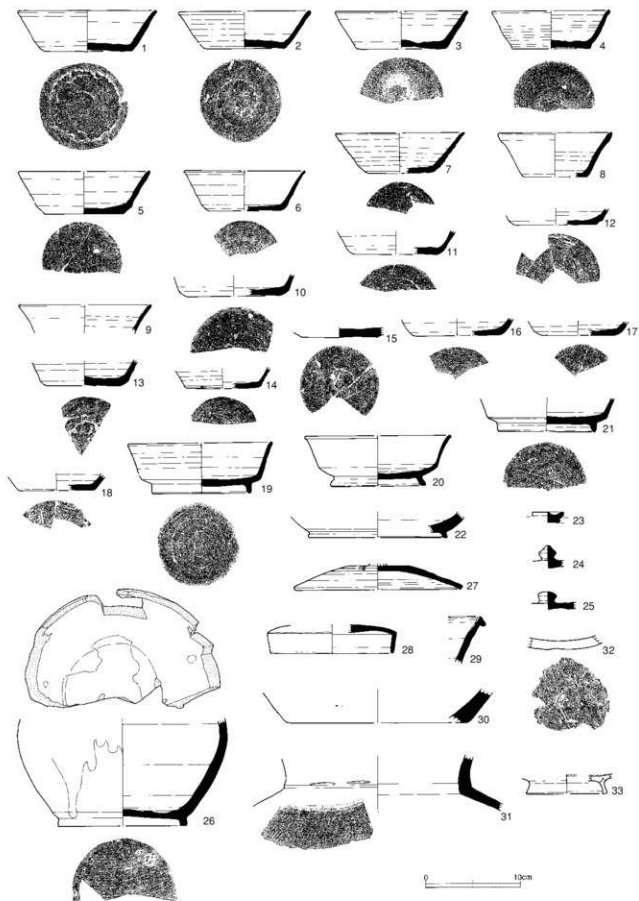
- 1 暗褐色（ローム粒含む）
- 2 褐色（ローム粒多量に含む ローム小ブロック少量含む 第1層混じる）

1住堀形A・B・CD土層断面

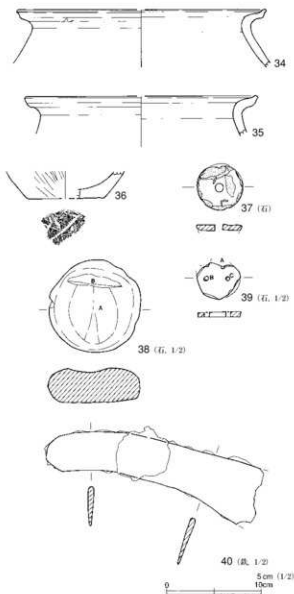
- 1 褐色（ローム小ブロック多量に含む 黒褐色土混じる）



第22図 第1A・B号住居跡遺物出土状況（トーン部は焼土）



第23図 第1A号住居跡出土遺物 (1)



第24図 第1 A号住居跡出土遺物(2)



第25図 第1 B号住居跡出土遺物

なるのではないと思われる。見事な緑色釉が下垂する優品である。底部外面の静止糸切り痕や胎土などからみて東海産の可能性が高いのではないだろうか。こうした優品は遠方の優品が流通し、一般集落に住む人々もそうした製品を入手することが可能であったのだろう。26の長頸瓶は覆土上層の第1～3層付近から出土しているが、長頸瓶と同様に釉が厚くかかる短頸壺蓋28もそのあたりから出土している。胎土からみて26と28は生産地が異なる

ものと考えられ、短頸壺蓋28はおそらく在地産(木葉下窯産か?)になる可能性が高い。須恵器有台杯21は底部が50%ほど遺存する資料であるが、体部立ち上がり上部の破面が部分的に磨滅しており、体部破損後の使用が考えられる資料である。多少欠けても使用にあまり支障が生じない状態であれば、使い続けることは十分考えられることである。有台杯21は口縁部破損後、もしかすると体部を打ち欠いて皿状にして使用されていたことも考えられる。最終的には底部が大きく割れてしまったため、廃棄されたものであろう。欠けた口縁部、打ち欠いた体部、残りの底部が、どこに廃棄されているのか、そうした視点で遺物出土状況の検討をすることが今後必要である。土師器丸底杯32は底部に木葉痕が残る。古墳時代の遺物の混入かもしれないが一応掲載しておく。古墳時代後期以来の在地の土師器杯製作技法は基本的に木の葉を底部に置くやり方を探るようである。土師器有台杯(?)33は第1 B号住居跡からの出土品が混入したものかもしれない。石製紡錘車37は下面が大きく剥離する資料である。縁辺部に細かな剥離が多数認められるので、長期の使用が考えられる。岩質からみて日立産の千枚岩の可能性があろう。

第1 B号住居跡

遺構

位置 A地区に位置し、第1 A号住居跡と重複する。

新旧関係 切り合いから第1 A号住居跡→第1 B号住居跡となる。

竪穴部の規模・形態 住居南東隅のみの検出のため、竪穴部の規模・形態は不明である。

壁高 南壁38cmを測る。

竪穴部の覆土 竪穴部の覆土はGH断面によると、住居廃絶後、壁際に第10～13層が堆積した後、人為的埋土の可能性のある第6・8・9層が堆積する。断面図を見ると南壁上部に平坦部が認められるようであり、棚状の部分か壁上部に存在していた可能性がある。

住居掘形 住居掘形はGH断面によると、ローム層部分を掘り込んでおり、第1 A号住居跡との重複部分については、ほとんど掘り込んでいないようにみえる。

遺物

遺物の出土量は少なく全て覆土中からの出土である。

土師器有台杯(?) 1の存在からみて、9世紀第1四半期前後に位置づけられよう。

土師器有台杯1は胎土中に雲母細片を多量に含んでいる。第1A号住居跡出土の土師器有台杯33も同様の胎土であり、その点も33が第1B号住居跡への廃棄遺物である可能性を考えさせる。雲母(黒雲母?)を多量に含む須恵器模倣土師器供膳具は久慈郡産の製品と思われるが、その生産の展開に関する研究はこれからである。須恵器短頸壺蓋2は天井部の小片である。胎土からみて木葉下窯産であろう。

第2号住居跡

遺構

位置 B地区に位置し、住居北東部と南西部、および竈部分を現代の攪乱により破壊されている。

主軸方向・竈の位置 主軸方向はN-6°-Wを測り、竈を北壁中央に置く。

竈穴部の規模・形態 竈穴部の規模は5.2×5.4m、面積28.1㎡を測り、正方形を呈している。

壁高 壁高は東壁40cm、西壁36cm、南壁35cm、北壁53cmを測る。

壁周溝 壁周溝は西壁のみに認められる。

ピット ピットは、P1～4が主柱穴、P5が出入口施設関連のピットになる。P1とP5は、掘形調査時に確認された。床面で確認された主柱穴は小さかったため、住居廃絶後に柱周囲を掘り込んで抜き取ることはしていないものと思われる。

ピットの深さは、P2が99cm、P3が65cm、P4が67cm、P5が40cmを測る。

床面の状態 床面は、P5から北壁に存在する竈にかけて硬化しているが、その範囲は主柱穴内部を中心としている。住居中央部や南よりのところに、径30cm強の円形状に焼土や黒色土(炭化物?)の薄い堆積が認められた。床面で火を焚いた跡であろうか。

竈穴部の覆土 竈穴部の覆土は、西壁および南壁寄りの床面上にロームブロックを含む第4・5・13層が堆積しているのが注意される。竈穴部覆土は全体的にローム粒が多く含まれるが、ブロック土は顕著ではなく、積極的に人為的埋土と認めることは出来ない。

竈の構造 竈は壁面への掘り込みが小さく、I J土層

断面からみても竈全体が竈穴内に突出して造られていたことがわかる。竈はつぶれた状態で検出されたが、GH・I J断面からその構造を窺うことができる。

竈は黄褐色粘土により構築されるが、GH断面第10層に白褐色粘土も少量用いられている。少量であることから竈の補修に用いられた粘土であろうか。GH断面から推測される竈内側の幅は70cmほどである。竈内部に残る灰層からは、洗浄により炭化種実が検出されている。天井部粘土の厚さは25cm位であるとみられる。煙道は斜めに立ち上がり、煙道天井部は赤く焼けていた。煙道上端部の位置からみて、煙は屋外に排出されていたものではなく、住居内に出されていた可能性が高いと思われる。

住居掘形 住居掘形は、中央部を台状に残し、竈穴部周囲を掘り窪める形態であるが、壁際には高い部分を残している。

住居掘形調査により、主柱穴が複数重複して存在することが明らかとなり、当住居跡が3回建て替えられていることがわかった。主柱穴の組み合わせは、第1段階(P1A・P2A・P3A・P4A)→第2段階(P1B・P2B・P3B・P4B)→第3段階(P1C・P2B・P3C・P4C)の順で変遷するものと想定され、床面上で確認された柱穴は第3段階のピットの位置に対応する。

また、竈の両側の壁面近くから小ピットが検出されている。竈突口の位置ではないので突口部架構材を据えた穴ではない。竈上方に位置する天井あるいは棚のような、住居構造に伴うピットではないかと考えられる。

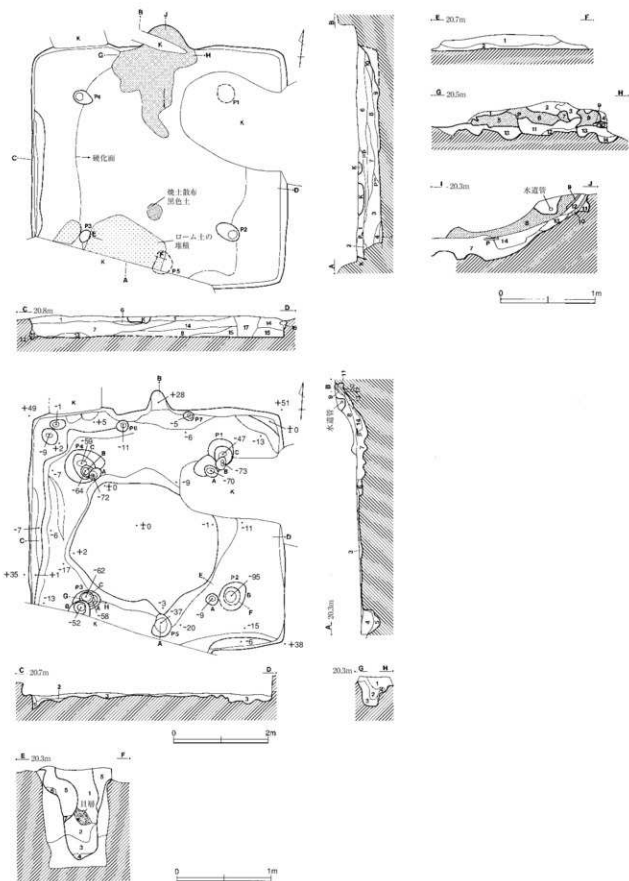
遺物出土状況

遺物は全て破損品である。遺物は覆土下層から上層まで出土するが、特に床面から覆土下層にかけて多量に出土している。覆土中からの遺物は自然堆積の過程における廃棄遺物とみられる。

なお、注目される遺物として、主柱穴P2覆土中層より左右の離れたマガキ貝殻(写真図版6)がまとまって出土した(写真図版2-16)。

遺物

第2号住居跡出土土器群は、須恵器杯の形態から8世紀後半に位置づけられる。有台杯16や有台杯蓋17の形態からみて住居の廃絶時期は8世紀第3四半期とみたい



第26図 第2号住居跡 (下の図は住居跡掘形)

2住A B・C D土層断面

- 1 褐色 (ローム粒多量に含む ローム小アブロック含む)
- 2 褐色 (白褐色粘土粒・小アブロック多量に含む ローム粒含む)
- 3 暗褐色 (ローム粒やや多量に含む 暗褐色土混じる)
- 4 明褐色 (ロームアブロック多量に多量に含む 暗褐色土混じる)
- 5 黒褐色 (ローム小ブロック・ローム粒やや多量に含む)
- 6 黒褐色 (ローム粒やや多量に含む 白褐色粘土アブロック少量含む 黒褐色土混じる)
- 7 暗褐色 (ローム粒やや多量に含む ローム小アブロック含む 白褐色粘土アブロック少量含む)
- 8 褐色 (白褐色粘土粒・ローム粒多量に含む)
- 9 褐色 (白褐色粘土アブロック含む ローム粒やや多量に含む 黒褐色粘土混じる)
- 10 褐色 (ローム粒多量に含む 白褐色粘土粒少量含む)
- 11 黒褐色 (ローム粒含む)
- 12 暗褐色 (ローム粒多量に含む)
- 13 暗褐色 (ロームアブロック多量に含む)
- 14 暗褐色 (ローム粒やや多量に含む 黒褐色土混じる)
- 15 暗褐色 (ローム粒やや多量に含む)
- 16 褐色
- 17 暗褐色 (ローム粒多量に含む ローム小アブロック含む 雑丸層か?)

2住E F土層断面

- 1 褐色 (ロームアブロック多量に含む 黒褐色土混じる)
- 2 暗褐色 (ローム粒やや多量に含む)

2住GH土層断面

- 1 明褐色 (ロームアブロック多量に含む)
- 2 明褐色 (ローム粒多量に含む)
- 3 明褐色 (ロームアブロック多量に含む 暗褐色土混じる 焼土アブロック少量含む)
- 4 明褐色 (ローム粒多量に含む)
- 5 黄褐色 (黄褐色粘土)
- 6 黄褐色 (第5層の崩壊土)
- 7 黄褐色 (黄褐色粘土主体 焼土少量含む 暗褐色土少量混じる)
- 8 黄褐色 (黄褐色粘土主体 白褐色粘土アブロック少量含む 暗褐色土少量混じる)
- 9 黒褐色
- 10 白褐色 (白褐色粘土)
- 11 暗褐色 (灰多量に含む 焼土小アブロック少量含む ローム粒含む)
- 12 暗褐色 (ロームアブロック多量に含む)
- 13 明褐色 (ロームアブロック多量に含む 黒褐色土混じる 床下雑土)
- 14 黄褐色 (ロームアブロック多量に多量に含む 暗褐色土混じる 床下雑土)

2住I J、横形A B・C D土層断面

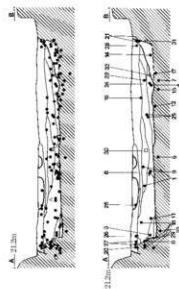
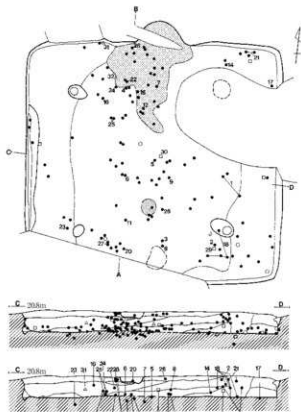
- 1 明褐色 (ローム粒多量に含む ロームアブロック少量含む)
- 2 黄褐色 (ロームアブロック主体)
- 3 暗褐色 (ロームアブロック多量に含む 黒褐色土混じる)
- 4 褐色 (ローム小アブロック多量に含む)
- 5 黄褐色 (ローム土主体)
- 6 黄褐色 (ローム土主体 暗褐色土少量混じる)
- 7 明褐色 (ロームアブロック多量に含む 黄褐色粘土アブロック含む 暗褐色土混じる)
- 8 黄褐色 (黄褐色粘土)
- 9 赤褐色 (崩壊が壊けた層 焼土主体)
- 10 黄褐色 (黄褐色粘土主体 焼土少量含む 暗褐色土混じる)
- 11 褐色 (ローム粒多量に多量に含む)
- 12 暗褐色 (ローム粒多量に含む 焼土少量含む 黒褐色土混じる)
- 13 褐色 (黄褐色粘土崩壊土混じる 焼土アブロックやや多量に含む 黒褐色土少量混じる)
- 14 褐色 (灰・焼土を多量に含む)

2住横形E F土層断面

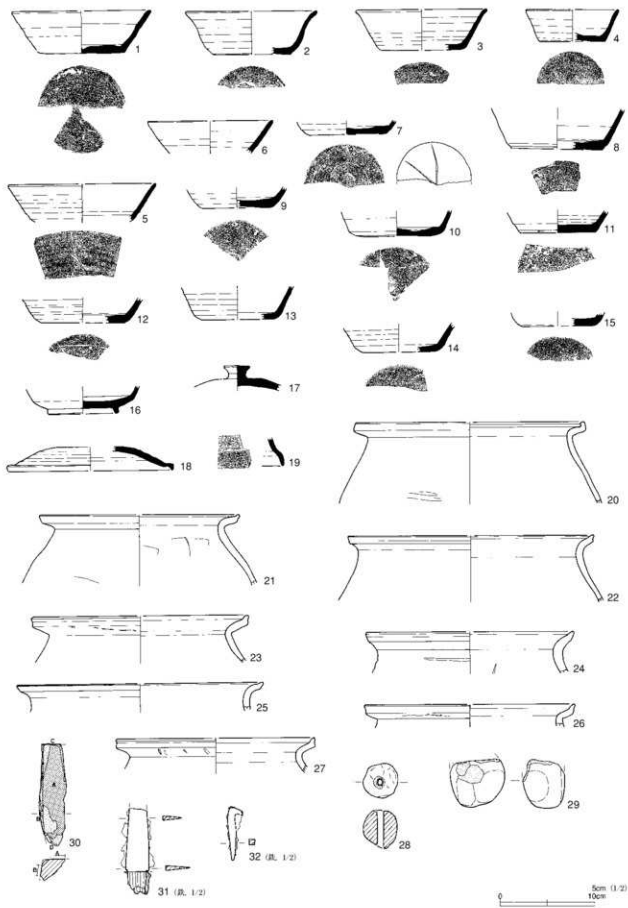
- 1 暗褐色 (ローム粒多量に含む 雜り無し)
- 2 暗褐色 (ローム粒多量に含む ローム小アブロック少量含む 雜り無し)
- 3 褐色 (ローム土多量に混じる 雜り無し)
- 4 明褐色 (ローム土と暗褐色土の混在層 固く締まる 柱のあたり頃と思われる)
- 5 褐色 (ロームアブロック・黒褐色土アブロック多量に含む)
- 6 黄褐色 (ロームアブロック主体 雜り有り)
- 7 明褐色 (ローム粒主体)
- 1 ハードローム
- 2 1層中にパリス混じる

2住横形GH土層断面

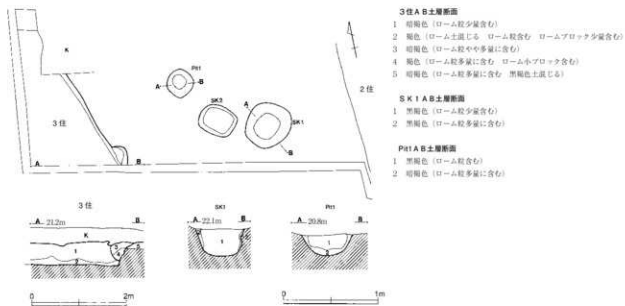
- 1 褐色 (ロームアブロック多量に含む ローム小アブロック少量含む 黒褐色土アブロック含む)
- 2 明褐色 (ロームアブロック多量に含む 黒褐色土小アブロック含む)
- 3 黄褐色 (ロームアブロック主体 暗褐色土混じる)
- 4 黄褐色 (ローム土)



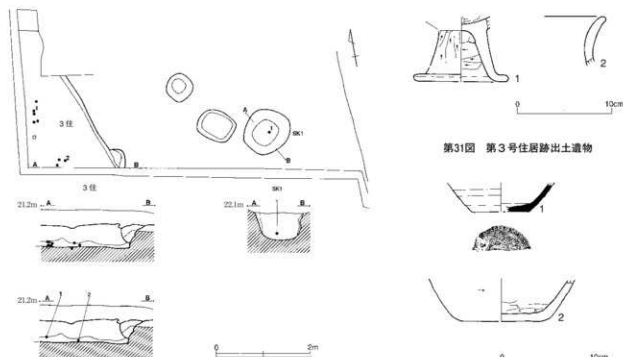
第27図 第2号住居跡遺物出土状況



第28図 第2号住居跡出土遺物



第29図 第3号住居跡、第1・2号土坑、第1号ピット



第30図 第3号住居跡・第1号土坑遺物出土状況

が、当土器群は時期幅があり、8世紀第4四半期頃まで廃棄行為が続いていたことが考えられる。

須恵器有台杯(?)5の体部外面にはヘラ描き状のものが認められるが、内容は不明瞭である。須恵器杯13・有台杯16の体部破面に磨滅部が認められることから、それらの土器は口縁部が欠けた後も使用されていた可能性がある。特に有台杯16は体部に打ち割り調整を施しているのではないだろうか。関部付近のみを残す刀子31は、把部の木質を一部残している。32は完形の小型の釘と考

第31図 第3号住居跡出土遺物

第32図 第1号土坑出土遺物

えられる。住居跡床面付近からの出土であるため、第2号住居跡で使用されたものかもしれない。

第3号住居跡

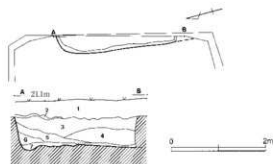
遺構

位置 B地区に位置する。住居東壁の一部のみの検出であるが、北側を擾乱により破壊されている。

壁高 壁高は東壁40cmを測る。

竪穴部の覆土 暗褐色土を基調としており自然堆積土

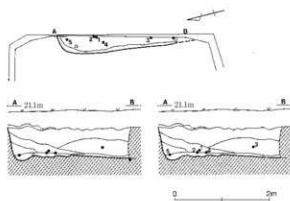
II 遺構と遺物



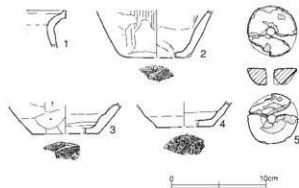
4住A B土層断面

- 1 砂・砂・ローム土混じりの硬瓦層
- 2 黒褐色（ローム粒含む、非常に硬まり有り）
- 3 褐色（ローム粒多量に含む、硬まり有り）
- 4 暗褐色（ローム粒含む）
- 5 暗褐色（ローム粒含む、黒褐色土混じる）
- 6 褐色（ローム粒やや多量に含む）
- 7 明褐色（ロームブロック多量に含む、断面粗土）

第33図 第4号住居跡



第34図 第4号住居跡遺物出土状況



第35図 第4号住居跡出土遺物

かと思われる。

遺物出土状況

遺物は全て破損品であり、自然堆積の過程における廃

棄遺物とみられる。出土状況は床面に2ヵ所の遺物集中部が認められた。いずれも住居廃絶直後の廃棄遺物群であろう。

遺物

土師器高杯1は短脚で裾が短く急に開く形態を有する。武田西端遺跡第37B号住居跡出土土師器高杯19を類例とみなしてよければ、7世紀第3四半期頃に位置づけられる可能性があろう。

第4号住居跡

遺構

位置 B地区に位置する。竪穴部北西隅部のみを検出である。

壁高 壁高は西壁52cm、北壁56cmを測る。

竪穴部の覆土 竪穴部の覆土は、住居廃絶後、壁際に第6層が堆積した後、第3～5層が自然堆積し埋没したものとみたい。竪穴部の覆土は、ブロック土等あまりみられないので、自然堆積を主とするものと思われる。

住居掘形 住居掘形は土層断面図の第7層が掘形埋土と思われる。第7層の厚さは薄く、西壁直下においては床下はほとんど掘り込まれていないことがわかる。竪穴部全体の様相は不明である。

遺物出土状況

遺物は全て破損品である。遺物はほとんどが住居床面からの出土である。土師器紡錘車5は、竪穴部隅の床面上から出土している。

遺物

当住居跡からの出土遺物は少なく、土師器を主とする。1・3・4が在産産、2が常陸型甕である。在産産を主とするなか、常陸型甕が混じる様相からみて、9世紀に位置づけられるのではないだろうか。5は土師器紡錘車であるが遺存状況が悪い。黒色処理が施されていた可能性がある。

2 土坑・ピット

第1・2号土坑（SK1・2）、第1号ピット（Pit1）はB地区に位置する。規模は、第1号土坑が長軸98cm・短軸88cm・深さ56cmを測り不整形を呈する。第2号土坑は、長軸77cm・短軸62cm・深さ60cmを測り隅丸長方形を呈する。第1号ピットは径52cm・深さ

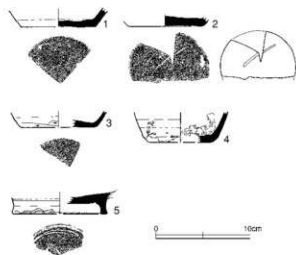
24cmを測り円形を呈する。

遺物はSK1から須恵器杯1と土師器甕2が出土していることから、SK1は須恵器杯1の年代を参考にすれば、9世紀後半の土坑になる可能性がある。

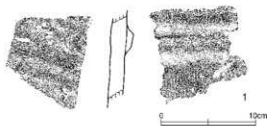
3 表土出土の遺物

A地区 A地区表土から出土した古代の遺物を掲載する。1～4は須恵器杯底部片である。1は外面全体に降灰がみられる資料である。どのような重ね焼きがなされたのであろうか。2は二つの破片が接合し、記されていたヘラ記号が判明した資料である。3はおそらく木葉下産ではないかと思われるが、底部と体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。4は内外面に黒色漆の付着がみられる。漆塗りの際の容器として用いられたか、土器そのものに塗ったかのどちらかであろう。内面の漆膜が厚みを持つことを考えれば、前者の可能性が高いように思える。5は高台端部を細かく欠失する有台杯破片である。長期の日常的使用が考えられよう。

B地区 円筒埴輪片が1点のみ採集されている。現状



第36図 A地区表土出土遺物



第37図 B地区表面採集遺物

では付近に古墳は存在しないため、客土中の混入品かもしれない。ただし那珂川左岸域の海岸に沿う台地縁辺には古墳が連なるため、当遺跡付近に古墳が存在した可能性もあるので、今後注意が必要であろう。

4 遺物観察表

第1A号住居跡

1 台帳:P5・7・68・69, No.1, A区No.1・2・4 材質:須恵器 器種:杯 残存:口縁部10%欠失 法量:口径14.4, 器高4.3, 底径9.3 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰), 骨針少 技法等:回転ヘラ切り。体部外面の一部に薄く自然釉がかかる。口縁部内面の一部にみられる焙着痕からみて、合わせ口状の重ね焼きがなされたようである。口唇部摩滅。底部周縁部やや摩滅。備考:木葉下産か

2 台帳:P36・37 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部上半90%欠失, 体部下半50%欠失 法量:口径(13.6), 器高3.9, 底径8.6 色調:灰色 胎土:礫(灰, 白), 骨針少 技法等:回転ヘラ切り。備考:木葉下産か

3 台帳:No.13 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部50%, 体部30% 法量:口径(13.9), 器高4.0, 底径(9.4) 色調:暗灰色 胎土:砂(白多, 白透少), 骨針少 技法等:ヘラ切り。外面全体に薄く自然釉がかかる。口唇部および外面体部下端摩滅。備考:木葉下産か

4 台帳:P95, No.2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部55%, 体部45% 法量:口径(12.3), 器高4.0, 底径(8.1) 色調:灰色 胎土:礫(白), 砂(白, 白透少), 骨針 技法等:回転ヘラ切り。外面底部中央ナア。焼成硬質。口縁部内面および底部外面周縁部が摩滅する。体部外面がやや摩滅。備考:木葉下産か

5 台帳:P6・67 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部60%, 体部25% 法量:口径(13.8), 器高4.5, 底径8.3 色調:灰色 胎土:礫(灰, 白), 骨針微量 技法等:底部外面1方向手持ちヘラ削り。備考:木葉下産か

6 台帳:P60・62 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部35%, 体部15% 法量:口径(12.7), 器高4.2, 底径(7.6) 色調:灰色 胎土:砂(白, 灰少), 骨針少 技法等:底部外面回転ヘラ削り。口縁部内面やや摩滅。外面全体に薄く自然釉がかかる。備考:木葉下産か

7 台帳:P119 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部35%, 体部20% 法量:口径(13.4), 器高4.3, 底径(7.4) 色調:灰色 胎土:礫(白, 白透少), 骨針少 技法等:底部外面ナア。体部外面・口縁部内面が一部暗色化しており、正位の重ね焼きが推定される。備考:木葉下産か

8 台帳:P81 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部15% 法量:

II 遺構と遺物

- 口径(11.9)、器高4.7、底径(6.6) 色調：灰色 胎土：礫(白、灰、白褐)
- 技法等：体部外面に白褐色自然釉が厚くかかっていることから、同器種を合口状にして重ね焼きをしたものか。
- 9 台帳：№1・2 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部20% 法量：口径(13.8) 色調：灰色 胎土：砂(白)、骨針少 技法等：口縁部内面摩滅。備考：木葉下産物か
- 10 台帳：P18 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部30% 法量：底径(10.1) 色調：白褐色 胎土：礫(灰、白少)、砂(灰、白透、透少) 技法等：底部外面回転ヘラ削り。
- 11 台帳：P61、№2 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周30% 法量：底径(8.8) 色調：明灰色 胎土：砂(透多、白、灰少) 技法等：回転ヘラ切り。外面底部外縁摩滅。備考：木葉下産物か
- 12 台帳：P78、№2・4 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部45% 法量：底径(8.6) 色調：灰色 胎土：礫(白)、砂(白、白透少)、骨針微量 技法等：回転ヘラ切り。内面に降灰。焼成硬質。備考：木葉下産物か
- 13 台帳：№1、A区№4 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部30% 法量：底径(7.9) 色調：灰色 胎土：小石(明灰少)、礫(白、白透少、灰少)、骨針少 技法等：回転ヘラ切り。焼成硬質。備考：木葉下産物か
- 14 台帳：A区№1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部35% 法量：底径(7.7) 色調：灰色 胎土：礫(白少)、砂(白、透小)、骨針少 技法等：外面体部下端・底部回転ヘラ削り。焼成硬質。備考：木葉下産物か
- 15 台帳：№1・4、A区№1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部80% 法量：底径8.2 色調：明灰色 胎土：小石(白少)、砂(白少、白透少、灰少) 技法等：回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号。外面底部周縁および内面やや摩滅。備考：木葉下産物か
- 16 台帳：№13 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部20% 法量：底径(8.6) 色調：白灰褐色 胎土：礫(灰少)、砂(白透、白少、灰少) 技法等：底部外面回転ヘラ削り。外面体部下端摩滅。備考：木葉下産物か
- 17 台帳：P14、A区№2 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部20% 法量：底径(7.9) 色調：灰色 胎土：砂(白)、骨針微量 技法等：ヘラ切り。外面底部周縁摩滅。備考：木葉下産物か
- 18 台帳：№2・4 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周30% 法量：底径(7.9) 色調：明灰色 胎土：砂(白透多、白)、白雲母多 技法等：底部外面1方向手持ちヘラ削り。備考：新治産物
- 19 台帳：P31 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：体部80%欠失 法量：口径(15.1)、器高5.3、高台径10.2 色調：灰色 胎土：礫(白

多、灰少)、骨針少 技法等：底部外面ヘラ記号。口唇部および高台接地面摩滅。底部内面中央部やや摩滅。備考：木葉下産物か

20 台帳：P40、№2・3、A区№2 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：底部40%(高台部15%)、体部10% 法量：口径(15.3)、器高5.3、高台径(9.7) 色調：外面白灰褐色、内面白褐色 胎土：礫(灰、白少、透少)、骨針微量、スコリア少 技法等：底部外面回転ヘラ削り。底部外面の高台接合部に2本の沈凹。口縁部内面摩滅。備考：木葉下産物か

21 台帳：P83・84 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：底部50% 法量：高台径(10.1) 色調：灰色 胎土：礫(白、灰少)、骨針少 技法等：底部外面回転ヘラ削り→高台接合→ヘラ記号。高台接地面摩滅。底部内面中央部やや摩滅。体部破面が部分的に摩滅するので、体部破損後も使用された可能性がある。備考：木葉下産物か

22 台帳：P15、A区№4 材質：須恵器 器種：壺 残存：高台部20% 法量：高台径(14.5) 色調：灰色 胎土：礫(白、灰少) 技法等：高台部外面から体部外面にかけて薄く自然釉がかかる。焼成硬質。

23 台帳：P12 材質：須恵器 器種：杯蓋 残存：紐部 法量：紐径3.2、紐高0.4 色調：暗灰色 胎土：礫(白、灰少)、骨針微量 技法等：一 備考：木葉下産物か

24 台帳：№1 材質：須恵器 器種：蓋(有台杯蓋か) 残存：紐部 法量：紐径1.8、紐高1.6 色調：灰色 胎土：礫(灰)、砂(白、灰少)、骨針少 技法等：頂部摩滅。備考：木葉下産物か

25 台帳：P111 材質：須恵器 器種：蓋(有台杯蓋か) 残存：紐部 法量：紐径2.0、紐高1.2 色調：灰色 胎土：礫(灰)、骨針少 技法等：頂部摩滅。備考：木葉下産物か

26 台帳：P3・23・24・29・70、A区№5 材質：須恵器 器種：広口短頸壺 残存：底部60%、胴部下半50% 法量：高台径(13.4) 色調：明灰色。胴部外面に自然釉がかかり、一部緑色部を呈し厚く下垂する。内面底部緑色自然釉かかる。内外面全面に黒色吹き出しあり。胎土：礫(白少) 技法等：静止承り切。備考：東海産か

27 台帳：P2・13・88 材質：須恵器 器種：有台杯蓋 残存：口縁部45%、天井部45%(紐部欠失) 法量：口径(17.5) 色調：灰色 胎土：礫(白多、灰)、骨針少 技法等：天井部回転ヘラ削り。備考：木葉下産物か

28 台帳：P25・26・38・39 材質：須恵器 器種：短頸壺蓋 残存：口縁部75%、天井部外周70% 法量：口径12.8 色調：灰色 胎土：砂(白) 技法等：天井部外面全面に緑色自然釉が厚くかかる。

29 台帳：№1・3・4 材質：須恵器 器種：壺 残存：頸部片 法量：一 色調：灰色。頸部外面黒化し、つやが出る。胎土：礫(白) 技法等：内外面コ罗纳テ。

30 台帳：P4 材質：須恵器 器種：甕 残存：胴部下端20% 法量：底径(19.2) 色調：外面黒褐色・暗灰色。内面明灰色。断面明灰色 胎土：砂(白透多、白)、白雲母多 技法等：外面胴部下端横方向へラ削り。備考：新治産

31 台帳：P9 材質：須恵器 器種：甕 残存：肩部から頸部下半にかけて25% 法量：- 色調：明灰色 胎土：砂(白、白透、透) 技法等：肩部外面平行線文吹き。胴部ヨコナデ。

32 台帳：№1 材質：土師器 器種：杯 残存：底部 法量：- 色調：外面褐色。内面暗褐色 胎土：礫(白透少)、砂(透多、白透多、灰、白濁少) 技法等：外面木葉痕。内面ヘラナデ。

33 台帳：P11 材質：土師器 器種：有台杯? 残存：高台部20% 法量：高台径(8.4) 色調：外面褐色。内面黒色 胎土：雲母細片多 技法等：底部内面1方向へラミガキ。黒色処理。

34 台帳：P1・90、№2 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20% 法量：口径(26.1) 色調：褐色。口縁部橙褐色 胎土：砂(白透多、白)、白雲母多 技法等：口縁部ヨコナデ後。胴部内面横方向へラナデ。備考：新治産付近産

35 台帳：P108、A区№5 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部20% 法量：口径(24.4) 色調：褐色 胎土：砂(白透多、白)、白雲母多 技法等：口縁部ヨコナデ。備考：新治産付近産

36 台帳：P71 材質：土師器 器種：甕 残存：底部20% 法量：底径(7.9) 色調：外面暗褐色。内面褐色 胎土：砂(白透多、白)、白雲母多 技法等：底部外面木葉痕。胴部外面ヘラミガキ。底部内面円周方向ナデ。備考：新治産付近産

37 台帳：S6 材質：石 器種：紡錘車 残存：下面是削離し上面のみ遺存 法量：4.8×4.6×0.6、重量23.4g 色調：暗灰色 技法等：縁辺部に細かな削離が多数みられる。備考：日立産の千枚岩か

38 台帳：S1 材質：石(軽石) 器種：不明 残存：定形 法量：4.9×4.8×1.8、重量11.0g 色調：暗灰褐色 技法等：平地面の片方の中央部が窪む(A)。削り取った縁(B)がみられる。

39 台帳：S5 材質：石 器種：石製模造品(形式不明) 残存：3ヶ所欠失 法量：2.3×1.8×0.3、重量2.1g 色調：青灰色 技法等：穿孔A～Cのうち、Aは貫通していない。備考：古墳時代遺物の混入か

40 台帳：I1 材質：鉄 器種：鎌 残存：基部欠失 法量：残存長11.5、重量37.5g

第1B号住居跡

1 台帳：№4 材質：土師器 器種：有台杯? 残存：底部70% 法量：高台径8.6 色調：外面橙褐色・褐色。内面黒色 胎土：砂(白

濁少、灰少)、雲母細片多 技法等：底部外面回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ(底部1方向)・黒色処理。

2 台帳：№1 材質：須恵器 器種：短頸甕蓋 残存：天井部15% 法量：- 色調：内面暗茶灰色。外面口辺部暗灰色・天井部明灰色

胎土：礫(灰少)、砂(白、白透)、骨針 技法等：天井部外面薄く自然種がかかる。備考：木葉下産産か

第2号住居跡

1 台帳：P4・37、№5・6・17 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部70%、体部25% 法量：口径(14.5)、器高4.5、底径9.0 色調：灰色 胎土：礫(白透少、灰少、白少)、砂(白、透少、灰少) 技法等：底部外面1方向手持ちヘラ削り。口唇部および外面体部下端摩滅。備考：木葉下産産か

2 台帳：P7 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周30%、体部20% 法量：口径(13.8)、器高4.6、底径(8.4) 色調：灰色。口縁部外面暗色化 胎土：礫(白多)、骨針微量 技法等：ヘラ切り。口縁部内面一部摩滅。備考：木葉下産産か

3 台帳：P16 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周30%、体部20% 法量：口径(13.6)、器高4.3、底径(8.7) 色調：灰褐色。口縁部外面暗色化 胎土：礫(白濁少、透少)、砂(白、灰少、透多) 技法等：底部外面手持ちヘラ削り。外面底部周縁および口縁部内面摩滅。

4 台帳：P63 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部50%、体部30% 法量：口径(9.7)、器高3.4、底径(6.9) 色調：灰色 胎土：礫(白少)、砂(白) 技法等：ヘラ切り。底部外面ヘラナデ。口唇部および外面底部周縁摩滅。

5 台帳：P49 材質：須恵器 器種：有台杯? 残存：体部20% 法量：口径(15.5) 色調：灰色。体部外面から口縁部内面にかけて暗灰色・白褐色自然軸。胎土：砂(白) 技法等：体部下端摩滅。口縁部内面一部摩滅。体部外面にヘラ書き状のものが認められる。

6 台帳：P88、№2・6 材質：須恵器 器種：杯 残存：口縁部30% 法量：口径(13.0) 色調：灰色 胎土：砂(灰、白)、骨針少 技法等：口縁部外面が暗色化することから、身のみを重ね焼きによると思われる。備考：木葉下産産か

7 台帳：P119、№1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部50% 法量：底径(7.9) 色調：灰色 胎土：礫(白) 技法等：ヘラ切り。底部外面ヘラナデ後、ヘラ記号。

8 台帳：P15、№6 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周20%、体部下半20% 法量：底径(9.8) 色調：橙褐色。底部外面明褐色 胎土：礫(白、灰少)、骨針 技法等：ヘラ切り。底部外面ヘラ先圧痕?。備考：木葉下産産か

9 台帳：P40 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部30% 法量：

II 遺構と遺物

底径(76) 色調:灰色 胎土:礫(茶、白)、砂(白、透)、骨針少

技法等:底部外面持ちヘラ削り。体部下端摩滅。備考:木葉下甕産か

10 台帳: №1・5・8・15 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部35% 法量:底径(84) 色調:灰色 胎土:礫(白少、灰少)、骨針微量 技法等:底部外面持ちヘラ削り。備考:木葉下甕産か

11 台帳:P17 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部30% 法量:底径(79) 色調:明灰色 胎土:砂(白透少)、白雲母細片多 技法等:外面体部下端・底部回転ヘラ削り。内外面に火だすきみられる。備考:新治甕産

12 台帳:P102 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周20% 法量:底径(89) 色調:灰色 体部外面明灰色 胎土:砂(白、灰少)、骨針少 技法等:底部外面持ちヘラ削り後、ヘラ記号。備考:木葉下甕産か

13 台帳: №2 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部下半15% 法量:底径(75) 色調:灰色 胎土:礫(白少) 技法等:外面体部下端やや摩滅。上部破面がやや摩滅することから、口縁部が欠けてからも使われていたようである。

14 台帳:P74 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周20%、体部下半20% 法量:底径(76) 色調:灰色、底部外面明灰色 胎土:礫(灰少)、砂(灰、白) 技法等:底部外面ヘラ記号? 備考:木葉下甕産か

15 台帳:P105 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周25% 法量:底径(80) 色調:灰色 胎土:礫(灰少)、砂(白、白透少、灰少)、骨針 技法等:底部外面持ちヘラ削り。外面体部下端摩滅。備考:木葉下甕産か

16 台帳:P27 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部50%、体部下半30% 法量:高台径(72) 色調:灰色 胎土:礫(白、灰)、骨針微量 技法等:底部外面回転ヘラ削り。底部内面やや摩滅。高台接地面および外面体部下端摩滅。体部破面の一部が摩滅することから、口縁部が欠けた後、体部に打ち削り調整を施した可能性がある。底部外面高台内側がやや汚染され黒色味を帯びる。備考:木葉下甕産か

17 台帳:P72 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:鈕部、天井部10% 法量:鈕径27、鈕高14 色調:明灰色 胎土:砂(白、灰)、骨針 技法等:- 備考:木葉下甕産か

18 台帳:P6・8・9・32、№2・11 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:口縁部50% 法量:口径(173) 色調:灰色、口縁部内外面暗褐色 胎土:礫(灰少、白) 技法等:口縁部内面に自然釉が薄くかかること、およびその範囲からみて、正位の有台杯と逆位の蓋を組み合わせて重ね焼きしたものと思われる。

19 台帳: №9 材質:須恵器 器種:高杯 残存:臀部片 法量:- 色調:暗灰色 胎土:砂(白少) 技法等:外面横方向カキ目。透かしあり。備考:古墳時代の高杯と思われる

20 台帳:P35 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(239) 色調:外面暗褐色、内面暗褐色-褐色 胎土:砂(白透多、白)、白雲母多 技法等:肩部外面縦方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

21 台帳:P99・100 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(208) 色調:素地褐色。胴部内面暗褐色に汚染される。外面口辺部・肩部以下黒褐色に煤ける。胎土:砂(白透多、白)、白雲母多 技法等:胴部内面横方向ヘラナデ、肩部外面縦方向ヘラナデ後、ナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

22 台帳:P64、№16 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(257) 色調:暗褐色 胎土:砂(白透多、透多)、白雲母細片多 技法等:口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

23 台帳:P116 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(225) 色調:外面橙色-褐色、内面暗褐色 胎土:砂(白透多)、白雲母多 技法等:胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。内面一部煤ける。外面粘土付着。備考:新治甕付近産

24 台帳:P62 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(218) 色調:茶褐色、口唇部付近褐色 胎土:砂(白透多、透)、白雲母細片多 技法等:胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

25 台帳:P57・58 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(258) 色調:外面褐色-橙色、内面暗褐色 胎土:砂(白透多、白)、白雲母 技法等:口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

26 台帳:P12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(220) 色調:赤褐色-橙褐色 胎土:砂(白透多、白少)、白雲母 技法等:口縁部ヨコナデ。備考:新治甕付近産

27 台帳:P82・93 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部25% 法量:口径(208) 色調:褐色-橙褐色 胎土:砂(白透多、白)、白雲母多 技法等:口縁部ヨコナデ。口縁部外面に肩部ヘラナデの跡に似たと思われるヘラのあたりが残る。備考:新治甕付近産

28 台帳:P79 材質:土師器 器種:球状土鉢 残存:孔部付近若干欠失 法量:長さ(4.0)、幅36 色調:褐色-橙褐色 胎土:小石(灰チャート少)、礫(白透)、砂(透) 技法等:手づくね成形

29 台帳:S 1 材質:石(軽石) 器種:不明 残存:大きく欠失する 法量:2.5×29×22、重量46g 色調:表面暗灰褐色、破面明灰色 技法等:部分的に煤ける?。

30 台帳:S 5 材質:石(変成岩) 器種:砥石 残存:破片 法

量：108×27×22、重量686g 色調：橙褐色 技法等：使用面2面（A・B面）遺存。A面は平滑であり主使用面と思われる。砥石層部になると思われるC面も平滑であり、あるいは使用面になるか。C面には浅い擦痕が多数みられる。D面は破面であるが、摩滅しているところからみて、破損後も使用されたことがわかる。備考：胎川層変成岩製砥石が火を受け赤化したものか

31 台帳：13 材質：鉄 器種：刀子 残存：両部付近。把部木質が一部遺存。 法量：残存長4.5、最大幅1.2、重量5.7g

32 台帳：12 材質：鉄 器種：釘 残存：完形 法量：長2.8、重量1.2g

第3号住居跡

1 台帳：P6 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部（裾部80%欠失） 法量：裾径（9.5） 色調：杯部内面褐色、外面赤色、脚部内面褐色・橙褐色 胎土：礫（褐透少、白褐少）、砂（白褐、透） 技法等：脚部外面縦方向へラ削り。脚部内面縦方向へラ削り。杯部内面へラナデ。外面赤色塗彩（ベンガラか？）。

2 台帳：P1 材質：土師器 器種：甕 残存：口辺部片 法量：一 色調：外面暗褐色、一部褐色・赤色、内面黒褐色。 胎土：砂（暗灰褐多、透多、白透少） 技法等：口縁部ココナテ。

第4号住居跡

1 台帳：P6 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部片 法量：一 色調：橙褐色 胎土：礫（白透、白少）、砂（透多、白、灰少） 技法等：胴部内面縦方向ナデ。口縁部ココナテ。胴部外面に暗灰褐色粘土付着。

2 台帳：P2 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下端20% 法量：一 色調：外面褐色・赤色、内面明橙褐色 胎土：砂（白透多、白少）、白雲母多 技法等：底部外面木葉痕。胴部外面縦方向へラミガキ。胴部内面縦方向へラナデ。外面の底部周縁の角が大きく摩滅している。胴部外面部分的に摩滅。備考：新治窯付産

3 台帳：P4 材質：土師器 器種：甕 残存：胴部下端20% 法量：底径（7.0） 色調：外面橙褐色、内面黒褐色 胎土：礫（白透少）、砂（透多、灰少） 技法等：底部外面へラ削り。胴部外面縦方向へラ削りの後、下端部横方向へラ削り。内面横方向ナデ。内面および破面が保っていることから、破損後火を受けたものらしい。

4 台帳：P3 材質：土師器 器種：甕 残存：底部25%、胴部下端20% 法量：底径（6.0） 色調：暗褐色、底部外面褐色 胎土：礫（白透、白、透少）、砂（白、灰少） 技法等：胴部内面縦方向ナデ。

5 台帳：P1 材質：土師器 器種：紡錘車 残存：90%、ただし

とところどころ欠失 法量：径5.2、厚1.7、重量39.1g 色調：素地褐色、表面黒褐色 胎土：砂（白少） 技法等：黒色処理か

第1号土坑

1 台帳：P1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部40%、体部下半40% 法量：底径（6.0） 色調：明褐色、底部外面明灰色 胎土：礫（白、灰少、白透少）、骨針少 技法等：へラ切り。備考：木葉下産産か。

2 台帳：№1・4 材質：土師器 器種：甕 残存：底部30% 法量：底径（10.4） 色調：外面胴部暗褐色・底部黒色、内面褐色 胎土：砂（透多、白透、白褐） 技法等：胴部外面横方向へラ削り。底部外面凹凸あり（指頭圧痕？）。内面の底部と胴部の境にへラナデ痕。外面全体に焼けた粘土付着。底部外面保ける。

A地区表土

1 台帳：№8 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部35% 法量：底径（8.0） 色調：灰色。外面降灰により白褐色。 胎土：砂（白） 技法等：外面降灰。

2 台帳：№5・9 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部50% 法量：底径7.9 色調：灰色 胎土：礫（白、灰）、砂（白、透少、灰少）、骨針微量 技法等：底部外面1方向手持ちへラ削り後、へラ記号。外面体部下端および内面やや磨滅。備考：木葉下産産か。

3 台帳：№1 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周20% 色調：灰色 胎土：砂（白、白透） 技法等：外面体部下端・底部手持ち、へラ削り。

4 台帳：№2 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部外周15%、体部下半10% 法量：底径（6.6） 色調：灰色 胎土：礫（白少） 技法等：内外面に薄く黒色塗付着する。内面底部付近の建線は厚みをもつ。

5 台帳：№9 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：底部20% 法量：高台径（9.7） 色調：灰色 胎土：礫（白透、白、灰少）、骨針少 技法等：底部外面回転へラ削り後へラ記号。高台接地面板状圧痕。高台端部外側が細かく欠失する。底部外面に爪状圧痕。備考：木葉下産産か。

B地区表面採集

1 台帳：№1 材質：埴輪 器種：円筒埴輪 残存：破片 法量：径5.15 色調：橙褐色 胎土：礫（透、灰、白）、砂（透多、白褐、白透、赤色スコリア少） 技法等：外面ハケ目の後、凸帯を付け、凸帯上下部をココナテ。内面横方向ナテ。

III 富士ノ上Ⅱ遺跡周辺における奈良時代集落の様相

一 竪穴住居跡の規模別分類とその構成について

1 那賀郡幡田郷における奈良時代集落の調査

茨城県ひたちなか市富士ノ上Ⅱ遺跡は、那珂川河口左岸台地上に立地する。奈良時代においてそのあたりは、『倭名類聚抄』を参考にすれば、常陸国那賀郡幡田郷に比定される〔文献1〕。郷は人的編成の単位であり、本来領域を伴わないが、里編成時に領域を持つ村を基礎にしたという考え方〔文献2〕や、郷城の成立が8世紀中葉にさかのぼるのではないかとする見方〔文献3〕などもあり、実態としては郷城という領域を伴っていたとみるべきであろう。地理的特徴や他郷比定地との位置関係などをとらえ、太平洋と本郷川に挟まれた那珂川河口左岸地域を仮に幡田郷と設定してみたい〔文献1〕。広い谷が生活領域を分ける境界として機能していたとする推測〔文献4〕も、本郷川による開析谷が幡田郷と岡田郷の境界になることを考えさせるものである。

富士ノ上Ⅱ遺跡において調査された第1A号住居跡および第2号住居跡は、8世紀第3-4半期頃に位置づけら

れているが、当時の富士ノ上Ⅱ遺跡周辺における集落は、どのような様相を呈していたのであろうか。富士ノ上Ⅱ遺跡の調査は遺跡全体の一部分にとどまるため、集落様相を明らかにすることは困難であるが、周辺地域の様相を探ることで、富士ノ上Ⅱ遺跡における奈良時代住居跡の位置付けも可能になるのではないだろうか。そこで、幡田郷における近年の調査から、船窪遺跡〔文献5〕・半分山遺跡〔文献6〕・鷹ノ巣遺跡〔文献7〕の奈良時代集落を参考事例として取り上げ、以下分析を進めてみたい。

2 規模からみた竪穴住居跡の分類

まず、各集落遺跡において調査された、奈良時代（8世紀）に属すると思われる住居跡から、竪穴部規模の判明する事例を抽出し、規模分布図（第39図）を作成してみると、竪穴部規模はおおよそ5つのまとまりをもち、竪穴部規模にもとづくⅠ類からⅤ類の類型が設定できた。

- Ⅰ類 一辺8m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅱ類 一辺6m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅲ類 一辺4mから5m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅳ類 一辺3m台の規模を持つ住居跡
- Ⅴ類 一辺2m前後の規模を持つ住居跡

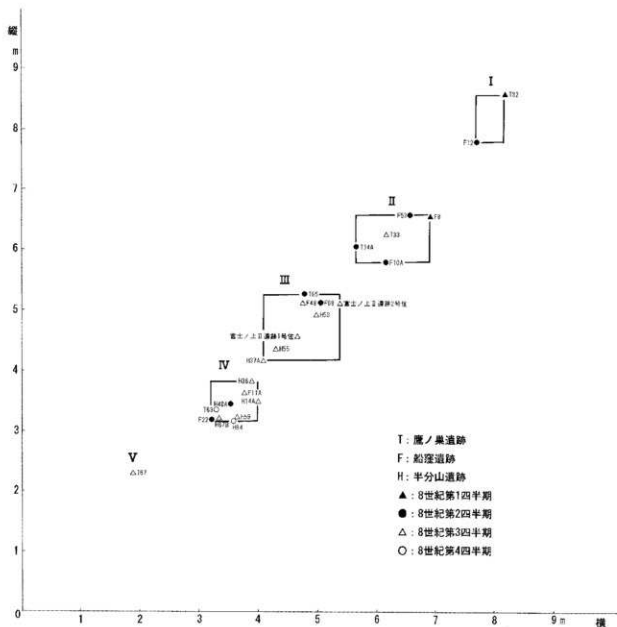
規模分布図をみると、Ⅱ類・Ⅲ類がデータの散布範囲が比較的広いのに対し、Ⅳ類はデータ量が多めであるにもかかわらず、比較的散布範囲は小範囲に収まり、規模の幅が小さいことがわかる。その要因を考えるため、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類の住居跡内部の空間利用を想定してみた。

竪穴部中央部の竪穴前面における床面の硬化範囲付近を居間とみなせば、その両脇に寝間が想定される（第40図）。一辺6m前後の規模を持つⅡ類の竪穴住居跡と一辺4mから5m前後のⅢ類の竪穴住居跡では、その寝間部分の広さに大きな違いが生じる（第41図）。Ⅱ類では寝間に大人二人が縦に寝ることができる広さがあるが、Ⅲ類ではそれは困難と思われる。おそらくⅡ類とⅢ類の規模の



第39図 那賀郡幡田郷における奈良時代集落

（奈良・平安時代遺跡の分布を示す。トーンのかかる遺跡は、遺物が報告されている遺跡である。）



第39図 整穴住居跡整穴部規模の分布

違いは、居住人数の差が主な要因であったのだろう。

ではⅢ類とⅣ類ではどうだろうか。Ⅲ類とⅣ類は寝間部分に縦に二人寝ることが困難であり、居住人数に差は認められない。そうするとⅢ類とⅣ類の住居面積の差は、炊事具や生産具といった生活用具の量や、棚の設置等が関わる可能性が高い。Ⅳ類の規模幅が小さいのは、所有する生活用具が少なかったため、その多寡による住居規模の差が生じにくかったことが理由として考えられよう。

このように想定してよければ、Ⅲ類とⅣ類の間には住居跡の性格に大きな差が存在することが推測される。その差は所有品の違いとともに、住居構造の違いにも現れ

る。幡田郷における8世紀の住居跡を四半世紀ごとに分類すると、Ⅲ類以上の住居跡は主柱穴を持つものがほとんどであり、Ⅳ類以下の住居跡は主柱穴を持たない(第42図)。このことは、Ⅲ類以上の住居跡の上屋がⅣ類以下より堅牢に造られていたことを窺わせる。また、住居掘形もⅢ類以上は四方外周全体を掘り込むタイプを主体とし、明瞭な掘形を持つのにに対し、Ⅳ類は四方外周全体を掘り込むものは少なく、掘形の様相に統一性が欠ける。つまり、主柱穴や掘形のあり方からは、Ⅳ類は簡略的な構造を有する住居跡であることが指摘でき、性格的には、短期的居住を前提に建てられた住居であるとみなすことができるのではないだろうか。

以上のように、幡田郷8世紀集落の住居跡を規模で分類すると、手をかけた構造を有し、長期的な居住を前提としたと考えられるⅢ類以上の住居と、短期的な居住を前提とし、移動性が高かったと推定されるⅣ類以下の住居に大きく分けられそうである。さらにⅠ類からⅢ類は、居住人数の多いⅡ類以上と少ないⅢ類に分けることができる。Ⅰ類とⅡ類の規模の差が生じる理由はいくつかあるが、集会所の側面から理解できるのではないだろうか。つまりⅠ類住居の居住者は、より多くの人々を話し合いに招いたり、集落外の人物との交渉をする必要の

ある。集落を代表する者であったのではないかと考えた(図13)。
い。

3 集落遺跡における竪穴住居跡の構成

さて那賀郡幡田郷内の8世紀集落において、住居跡の規模別類型はいかなる構成をとるのだろうか。結論から述べれば、各集落における竪穴住居群は分布からみて、Ⅲ類以上の竪穴住居で構成される中心部分と、Ⅳ類以下の竪穴住居で構成される周辺部分に分かれるようである。あえて想像するならば、移動性が高く、竪穴住居



Ⅱ類 (船型8住)

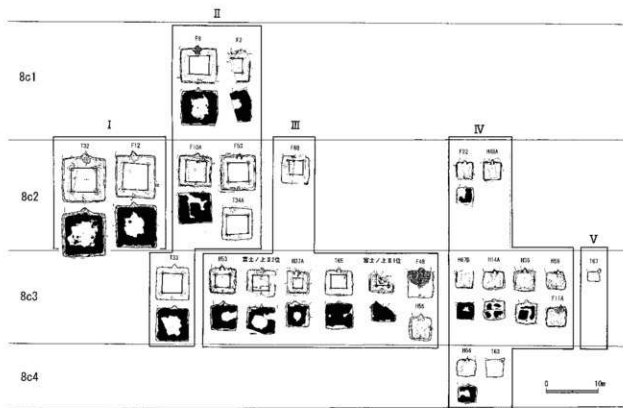
Ⅲ類 (半分山53住)

Ⅳ類 (半分山14A住)

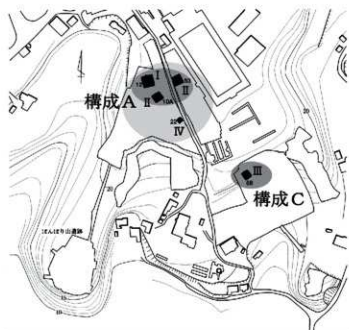
第40図 竪穴住居跡の空間利用

(〔文献8〕より引用)

第41図 寝間面積の比較 (人物の身長は160cm)



第42図 規模別にした竪穴住居跡の分類と消長 (黒塗り部は掘削痕部を示す。)



第43図 船道遺跡の竪穴住居跡群 (8c2)



第45図 半分山遺跡の竪穴住居跡群 (8c3)

群の周辺部分に展開するIV類の竪穴住居の居住者は、他所からの移住者、つまり当時浮浪逃亡者として扱われていた小作経営を主とする人々であるのではないかと思うのである。直木孝次郎氏は天平13年6月の山代国移を挙げ、そうした浮浪者が有力な郷戸の内に寄客的な寄寓者として取り入れられていたと述べられている[文献9]。IV類存在の背景にも、そうした事情を想定したいのである。

竪穴住居跡群の構成としては、集落形成の主体になると思われる、住居跡群中心部分のあり方に注目する必要があるだろう。本稿で扱う幡田郷の8世紀集落においては、その中心部分の構成として次の三種類の様相が指摘できる。



第44図 鷹ノ巣遺跡の竪穴住居跡群

(上：8c2、下：8c3)

- 構成A I類とII類により構成されるもの
- 構成B II類とIII類により構成されるもの
- 構成C III類のみで構成されるもの

構成Aの事例をみてみよう。船道遺跡の8世紀第2四半期においては、調査区北側に1棟のI類(F12)と2棟のII類(F10A・53)からなる、構成Aをとる中心部分があり、中心部分から南方に少しはなれてIV類が1棟(F22)存在している(第43図)。I類住居からは小破片であるが、内面放射状暗文が施され口縁部内面に沈線が巡る橙色を呈する小型の九底杯が出土している。また関係は明らかではないが、東方の貉谷津遺跡から出土している同時期頃の円面視2点も注目でき、あるいは船道遺跡の構成Aに居住する人物が廃棄したものである可能性もあろう。このほか、鷹ノ巣遺跡8世紀第2四半期の住居跡群も構成Aを形成する(第44図上段)。鷹ノ巣遺跡の構成Aは北方に溝跡(SD3)を伴う可能性がある。

次に構成Bの事例としては、鷹ノ巣遺跡8世紀第3四半期の住居跡群がある。8世紀第2四半期に構成Aが展開していた区域に成立しており、1棟のII類(T33)と1棟のIII類(T65)からなる、構成Bをとる中心部分があり、中心部分から北西にやや離れて、V類が1棟(T67)

存在している(第44図下段)。北部の溝跡(SD3)には、当住居跡群の廃棄品と同時期の土器が廃棄されているので、構成Bと溝跡は明らかに共存するものであろう。鷹ノ巣遺跡8世紀第3四半期の構成Bからは瓦が出土しており、特にⅡ類住居(T33)からは「山田文マ子夜祝」と刻書された丸瓦が出土している。調査者の稲田健一氏によると、この丸瓦は産産道に利用されていたものと推定されているので、おそらくⅡ類住居で用いられたものであろう。Ⅱ類住居に居住する人物は、丸瓦を用いるような寺院や正倉などに行く立場にあり、そこで瓦を入手したものと考えられる。なお鷹ノ巣遺跡第2四半期の構成Aの住居跡覆土中に廃棄されていた瓦片は、第3四半期の構成Bで使用されたものの一部が廃棄されたものとみることができよう。

構成Cの事例としては、半分山遺跡8世紀第3四半期の住居跡群がある。やや広く距離を置いて建つ3棟のⅢ類(H37A・53・55)からなる、構成Cをとる中心部分があり、中心部分から離れてⅣ類が、北に1棟(H67B)、東に2棟(H36・59)、南に1棟(H14A)存在する(第45図)。当住居跡群からは特に目立った遺物は出土していない。なお、船窪遺跡8世紀第2四半期集落において、調査区南東部分よりⅢ類が1棟(F68)検出されている。明確ではないがこれも一応構成Cとして捉えておく。

以上のように各集落の堅穴住居跡群は、構成A～構成Cをとる2～3棟からなる住居跡を中心部分とし、その周辺に小型のⅣ・Ⅴ類住居を展開させるという基本的構造では一致している。ただ構成Aが、集落の集会所としても利用することが可能なⅠ類のような大型の住居跡を核に形成されている点は、構成B・Cとの違いとして注意されよう。

また、鷹ノ巣遺跡の構成Bにおける溝の存在や瓦の利用などは、一般集落の中では特異な様相である。構成A・Bは集落経営の主体となる集団が居住した住居跡群である可能性があり、構成Bより構成Aの規模が大きい点からみて、構成Aの居住者が集落内で相対的により有力な立場にあった可能性がある。

構成CはⅢ類のみから形成されるように、中心部分における優劣がなく、なおかつ集会所として利用可能な大型住居の存在もないことからみて、集落周辺部に立地し、集落経営の主体的集団に経済的に依存しながら居住

する人々の住居群であった可能性が高い。それは特に目立つ遺物が構成Cから出土していないことにも現れている。船窪遺跡における構成Cの場合も、北部に位置する構成Aに従属する立場にあったことが考えられる。こうした8世紀第3四半期における「構成C+Ⅳ類」という集団は、集落経営の中心となる集団の生産規模拡大に伴い各地に成立してくるのかもしれない。

4 富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡の理解

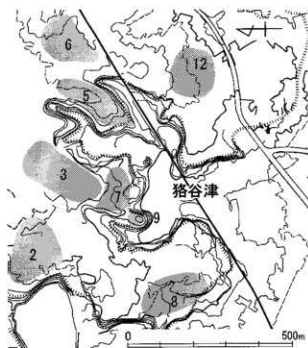
最後に、今回の富士ノ上Ⅱ遺跡発掘調査で検出された8世紀第3四半期の住居跡である第1A・2号住居跡の位置づけについて考えてみたい。

第1A号住居跡は全体が明らかではないが、主柱穴の位置などから推定復元すると、第2号住居跡とともに規模的にはⅢ類になることがわかる。両住居跡ともにしっかりと掘形をもち、主柱穴を有する。そうした点からみると、これら住居の居住者は、Ⅳ類に居住するような短期的居住を前提とした移動的集団ではなく、長期的居住を前提として当地に住居を建てた集団であったといえよう。

富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡からの出土遺物は廃棄物を中心としており、特に居住者の性格を示唆するような遺物は出土していないが、見事な緑色の自然釉がかかった長頸瓶の一部が第1A号住居跡覆土上層から出土している。廃棄品であるので、調査区外にこうした優品を使用するような人物が居住する次期の住居跡が存在するのであろう。もしかするとその住居跡はⅠ類もしくはⅡ類といった大型の規模を持つ住居跡になるのかもしれない。こうした大型住居が8世紀第3四半期の時期にも周辺に存在し、そうした構成Aや構成Bを形成する住居群の代表者の生産力に依存しながら、Ⅲ類の富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡は存在していたのではないかと考えたい。

なお、両住居跡の電灰からイネを主とする炭化種実が検出されたことから、当住居の居住者が稲作に関わっていたことは明らかである。地形的にみて遺跡の西方に入り込む猪谷津を中心とする低地帯に水田が展開していたのではないかと考えられる(第46図)。そうした水田の経営に関わる集落を構成する住居として富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡は存在していたのであろう。船

窟遺跡や半山遺跡も同じ低地における水田耕作に関わりながら存在していたと思われることから、それら遺跡を含む猪谷津周辺の遺跡群として富士ノ上Ⅱ遺跡は存在し、奈良時代においては各遺跡が密接な関係をもちつつ集落経営が展開していたことが想像されるのである。



第46図 猪谷津周辺の奈良・平安時代遺跡
(12が富士ノ上Ⅱ遺跡。遺跡名は第3図参照)

文献

- 1 佐々木義則2000「2 歴史的環境 -奈良・平安時代-」『武田石高遺跡』ひたちなか市教育委員会、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 2 鬼頭清明1989「郷・村・集落」国立歴史民俗博物館研究報告 22、国立歴史民俗博物館
- 3 山中敏史1998「律令国家の地方末端支配機構 -研究の現状と課題-」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって -研究集会の記録-』奈良国立文化財研究所
- 4 松村恵司1998「律令国家の地方末端支配と集落」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって -研究集会の記録-』奈良国立文化財研究所
- 5 福田健一ほか2005「船窟遺跡」ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 6 福田健一ほか2004「半山遺跡」ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 7 福田健一ほか2006「鷹ノ巣遺跡 第2次調査の成果」ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 8 谷鹿栄一ほか2007「住まいを読む」千葉県立房総のむら
- 9 直木孝次郎1968「奈良時代史の諸問題」塙書房
- 10 宮本常一1950「ふるさとの生活」

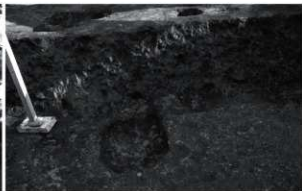
註

1 村の中心になる大きな家の集会的性格について、宮本常一氏は次のように語っている。「力のあるものが、何人かの人をひきつけて未開の土地に入ってゆき、みんなといっしょに苦心して村をつくった場合には、その中心になる家と、いっばんの百姓とは仲のよいものです。長野県の伊那谷には、そういう村がいくつかあります。村の中心になっている家は、おどろくほど大きなかまえをしていて、何かまわりの人たちに権力をしめそうとしているように見えますけれど、その家のなかに入ってゆくと、土間のひろいことと、イロリのある間の大いにおどろきます。そこが村の人のあつまる場所で、村人の寄合のあるときには、かならずそこへ集まったものでした。正月の初寄から田植え、山の口あけの相談、田へ水をひくはなしあい、伊勢講、秋葉講まで全部そこで行われたのです。このようにして、親方の家を中心にして、むすばれていました。〔文献9〕

写 真 图 版



1. 第1号住居跡



2. 第1号住居跡P4



3. 第1号住居跡瓦葺土層



4. 第1号住居跡南壁部出土状況



5. 第1号住居跡跡線率出土状況



6. 第1号住居跡掘形



7. 第1号住居跡掘形線先直



8. 第1B号住居跡



9. 第2号住居跡



10. 第2号住居跡南壁付近口—ム土堆積



11. 第2号住居跡礎



12. 第2号住居跡遺物出土状況



13. 第2号住居跡掘形 (1)



14. 第2号住居跡掘形 (2)



15. 第2号住居跡礎



16. 第2号住居跡P2土層断面 (力牛殿出土状況)



17. 第3号住居跡



18. 第3号住居跡遺物出土状況



19. 第4号住居跡



20. 第1号土坑 (SK1)



21. A地区調査前状況



22. B地区調査前状況

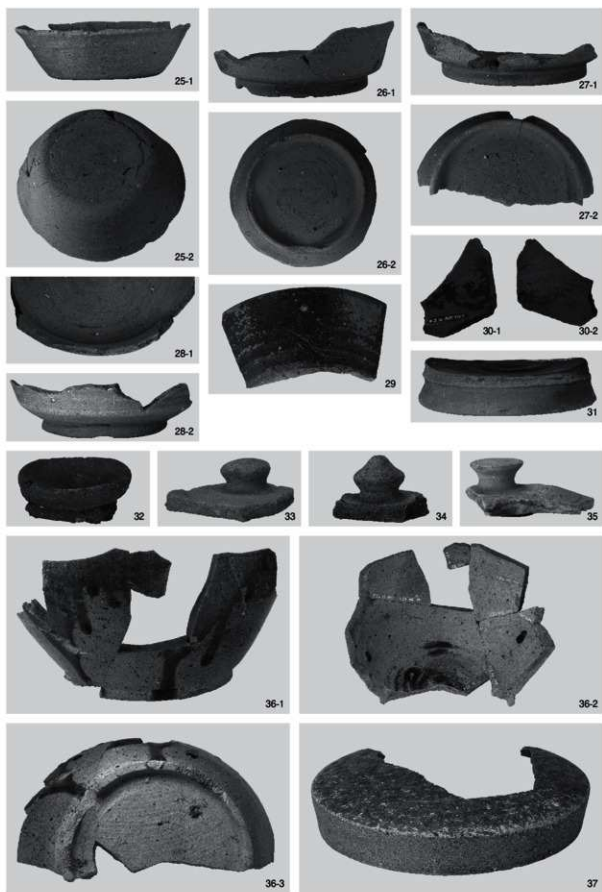


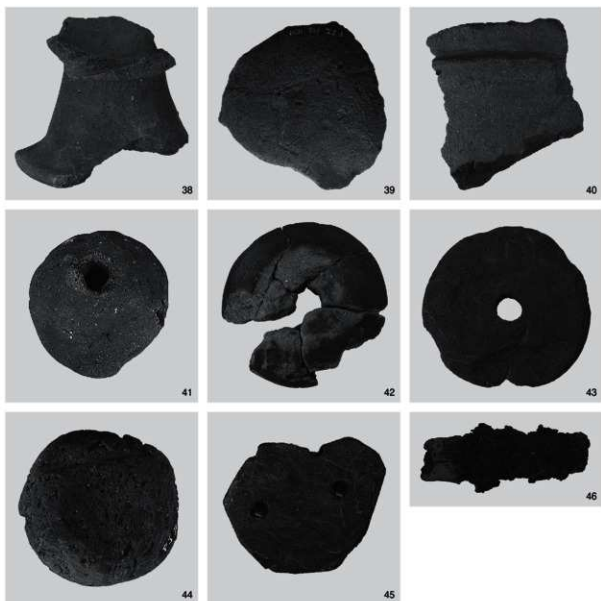
23. B地区調査状況



24. 那珂湊第二小学校児童の見学

图版 4 遗物 1

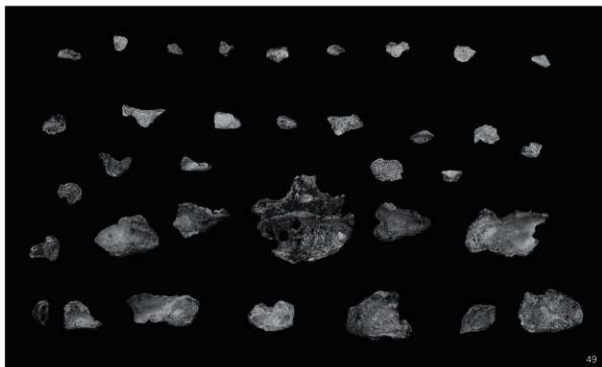




- 25-1. 須恵器杯 (第1 A号住居跡1)
 25-2. 25-1の底部
 26-1. 須恵器有台杯 (第1 A号住居跡19)
 26-2. 26-1の底部
 27-1. 須恵器有台杯 (第1 A号住居跡21)
 27-2. 27-1の底部
 28-1. 28-2の口縁部 (一部磨滅している)
 28-2. 須恵器有台杯 (第2号住居跡16)
 29. ヘラ雲きの施された須恵器有台杯? 体部 (第2号住居跡5)
 30-1. 漆の付着した須恵器杯内面 (A地区表土4)
 30-2. 30-1の外表面
 31. 土師器有台杯? (第1 B号住居跡1)
 32. 須恵器杯蓋紐部 (第1 A号住居跡23)
 33. 須恵器有台杯蓋紐部 (第1 A号住居跡25)
 34. 須恵器有台杯蓋紐部 (第1 A号住居跡24)
 35. 須恵器有台杯蓋紐部 (第2号住居跡17)
 36-1. 須恵器短頸壺 (第1 A号住居跡26)
 36-2. 36-1の内面
 36-3. 36-1の底部静止糸切り痕
 37. 須恵器短頸壺蓋 (第1 A号住居跡28)
 38. 土師器高杯 (第3号住居跡1)
 39. 土師器杯底部木葉痕 (第1 A号住居跡32)
 40. 円筒埴輪 (B地区表探1)
 41. 球状土錘 (第2号住居跡28)
 42. 土師器紡錘車 (第4号住居跡5)
 43. 石製紡錘車 (第1 A号住居跡37)
 44. 靱石 (第1 A号住居跡38)
 45. 石製模造品 (第1 A号住居跡39)
 46. 木製把が残る刀子 (第2号住居跡31)
 47. 釘 (第2号住居跡32)



48



49

48 マガキの貝殻の外側 (第2号住居跡ピット2覆土中より出土。フジツボと砂岩が付着する資料がみられる。)

49 48の内面

報告書抄録

フリガナ	フジノウエニイセキ
書名	富士ノ上Ⅱ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告
シリーズ番号	第38集
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行, 佐々木義則, 小松崎恵子, 色川順子
編集機関	財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行年	2008年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
フジノウエニ 富士ノ上Ⅱ	ひたちなか市 富士ノ上155-2他	08221	261	36° 21' 21"	140° 36' 16"	20.0~ 22.0m	20080122~ 20080307	160㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富士ノ上Ⅱ	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代	包含層 包含層 住居跡1基 住居跡2基 住居跡2基・土坑1基	土器(早期・中期)・石器 土器(後期) 土師器・須恵器・鉄製品・石製品 土師器・須恵器・鉄製品・石製品・貝 ・炭化種実 土師器・須恵器	

要約	<p>遺跡は、ひたちなか市の東部、海岸まで約500mほどの標高約21mの台地上に位置する。</p> <p>今回の発掘調査では、古墳時代後期の住居跡1基、奈良時代の住居跡2基、平安時代の住居跡2基・土坑1基、および各遺構からの出土遺物が検出されたほか、縄文時代早・中期の土器・石器、弥生時代後期の土器、古墳時代後期の埴輪などが少量出土している。注目される遺物としては、奈良時代の住居跡の主柱穴内から貝(カキ殻)がまとまって出土しており、砂岩やフジツボの付着からみて、付近の海岸にみられる岩礁からの採取が考えられる。また、奈良時代の2基の住居跡竈灰を水洗したところ、多量のイネ粒ほかの炭化種実が検出された。</p>
----	---

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第38集

富士ノ上Ⅱ遺跡

2008年3月31日発行

編 集 財団法人 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
発 行 ひたちなか市教育委員会
〒311-1214 茨城県ひたちなか市和田町2丁目12-1
T E L 029-262-4121
財団法人 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
(〒312-0011) 茨城県ひたちなか市中根3499
(ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内)
T E L 029-275-4623
印 刷 株式会社 高野高速印刷
